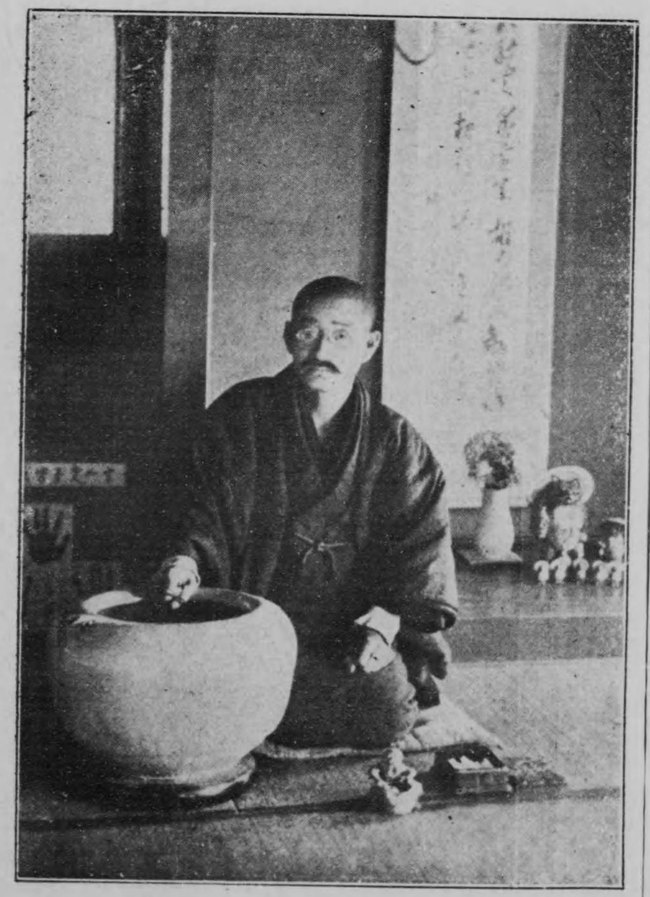
始

71-486
486

桂月文選

大正
4. 2. 17
内交



序

不稲者として有名なる唐の郭子儀には、八男八女ありき。男は皆出世し、女は皆佳婿を配して、子儀の孫は、その幾十人なるを知らず。一に其名を辨ずる能はず、来りて起居を候する者あれば、唯黙頷するのみなりきとか。

余の著述に於ては、また之に彷彿たるものあり。拙著女くとも一部づゝは、家に存し、借せと乞はれて、拒む能はざりしなり。

はず、而して傳せば、多くは戻り来らず。今家にあるは、十の三四に過ぎず。屈折りく人に去はれては、あゝそのやうな書を著したることありしかと、その、そのやうなる文を作りたることありしかと、唯點頭するのみ也。中には迂闊な僅少の悪文もあれど、また屠心の文なりしと思ひ立ちて、屠心の文を保存し置くむとせしが、拙著家を任ずは少なく、古本屋を捜せど、容易に見出すこと能はず、大に困みし居りしに、平生親しく

交ありし松本道別、田中桃葉の二君、諸所方々を捜し廻りて、その為めに斬く屠心の旧作を搜すを得たり。茲に新作をも取交せて、出して世に向ふ。国親国鹿の子炊惜、他国の流浪せし息子どもも久しぶりにて邂逅する心地も落ちらず。が、知らず、文章の神は何と見給はん。

大正三年初冬　大町桂月

桂月文選目次

紀行

夜の高尾山……一
大森の春夜……二
石田堤……七
ゆく春……一六
小金井の櫻……二八
九月の隅田川……三三
飛鳥山と西新井大師……三八
南洲留魂祠……四三

初夏の野……五五
府下の清涼境……六二
百草園……六八
二子紀行……七八
春のひと夜……八七
野田八村の桃花……九六
雪の白根山……一〇三
紅葉の旅……一〇九
常磐の山水……一三五
金華山……一四八
松見の瀑……一六五
親不知……一六九
島根半島の北岸……一七四
簸の川上……一八二
嵯峨の二日……一九三

紀事

陶庵侯に謁する記……二一二
獨笑記……二一九
學生演說會傍聽の記……二三五
柏木の閒居……二三七
動物園……二四六
國府臺……二五九
九十の春光……二七

聖堂とニコライ堂……一
關東の野……二八六
關東の山……二九二
關東の梅……三〇〇
奈良朝の文明……三〇四
源頼政の最後……三一〇
平家の覆滅……三一六
北條泰時……三三六
北條氏の末路……三四二
馬野山……三六三
尼子氏の勃興……三六八
鹿之助の流浪……三七二

水戸義公……三七七
赤穂城の明渡し……三八五
神崎與五郎……三九一
天鈿女命……三九六
鎌倉の女性……四〇七
勾當内侍……四一六
お春、お花……四二五

抒情

大原の懐古……四四五
一日の土工夫……四四九
杖銀杏……四六三

橋守……四六六
鐵槌……四七八
鼠日記……四九四
小犬……五二一
余の無妻主義……五二五
樗牛の一生……五三七
常陸山に與ふ……五五一
福澤翁を弔ふ……五五九
星亨を弔ふ……五六八
尾崎紅葉を弔ふ……五七一
乙羽を弔ふ……五七三
野の人を弔ふ……五七九

議論

日本帝國の使命……五八三
人格の修養……五八七
人格の感化……五九〇
達人の域……五九八
丈夫の襟度……六〇一
處世箴……六〇五
朋友論……六一〇
青年時代……六一五
中學時代の學問……六二七
文才ある少年を戒む……六三一

自から輕んずる人……六三四
幸福なる人……六三七
良妻……六四一
今の紳士の閨門……六四六
人生は趣味也……六四九
人生の味……六六一
發憤……六六七
浦島と人生問題……六七四
道樂の趣……六七八
心中……六八二
蜉蝣の人生觀……六八五
大言壯語……六九〇

旅行……六九三
快樂の源……六九九
美貌……七〇五
酒の戒……七〇九
宴會……七一二
藝術の聯絡……七一七
美術國としての日本國民の氣質……七二三
鎌倉大佛論……七二七
文章としての漢文の價値……七三八
鎌倉時代の文章……七四六
明治の精神的文明……七五三

書簡

北條より……七六五
都より……七六六
秩父より……七八〇
箱根より……七八三
湯本より……七八四
箱根山上より……七八五
鵠沼より……七八六
伊東より……七八七
大島より……七八九
幽囚中より……七九〇

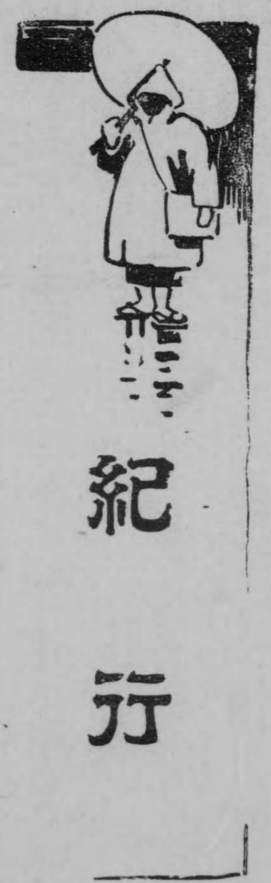
杉烏山へ……七九一
松本道別へ……七九三
道別・桃葉へ……七九四
田中桃葉へ……七九五
伊澤修二氏へ……七九七
伊澤末五郎氏へ……七九七
笹川臨風へ……八〇一
再び笹川臨風へ……八〇二
獄中の松本道別へ……八〇三
再び獄中の道別へ……八〇四
入營中の某青年へ……八〇六
新婚の某夫婦へ……八一〇

某高利貸へ……八一六
某館主へ……八一八

雜

牛經……八二一
趣味くさ〳〵……八二三
文壇名勝誌……八二九
醉後放言……八三六
小絃錄……八三九
當代の理想……八四四
當代の不平……八四六
古人の不平……八四七
片雲錄……八五〇
醉漢……八五四
成り上り者の時代……八五七
九品佛……八六二
冷汗錄……八七五
面白き活劇……八七九
婦人七去の說……八九二
明治の文章家……九一一
練馬の一夜……九二三

桂月文選目次 終



行紀

桂月文選

大町桂月著

夜の高尾山

夜光命と稱する男あり。電燈輝く今の世の中に、己れが頭の光を以て、闇の夜を照さむとす。馬鹿者に非ずや。十口坊と稱する男あり。一つの口にても滿足には食はれぬ世智辛き世の中に、十の口を備へて、頰張らむとす。馬鹿者に非ずや。裸男と稱する男あり。『裸で道中が成るものか』と云はるゝ世の中を、裸で通らむとす。馬鹿者に非ずや。こゝにまた小石

川の小日向臺に、檜葉菩薩と稱する賢人あり。門内の檜葉の樹、偉大にして、東京に冠たるを以て、斯く名づく。啻に其檜葉が偉大なるのみならず、其人格偉大也。其學も、其德も、其才も、みな偉大也。三人の馬鹿者、年來この菩薩の指導を受く。或時三馬鹿相會し、相議して曰く、我等の如き馬鹿者は、何事に於ても、小日向の菩薩に敵する能はず。然し我等も日本男兒と生れたるからには、何かの事にて、一つ此の菩薩を負かしたきものなりと。馬鹿の寄合だけに、議する所も馬鹿げたる事也。されど、馬鹿は馬鹿ながら、三人寄れば文珠の智慧とかや。裸男、礑と膝を叩いて曰く、諸君喜べ。こゝに奇策あり。檜葉菩薩は身體肥滿せり。山登りの一事は、我等に敵する能はざるべし。高尾山に誘ひて、一つ困らせて見ては如何にと。夜光命眉を顰めて曰く、その策や好し。唯軍用金なきを如何せむと。十口坊膝を進めて曰く、君等は忘れたるか。日本橋區の眞中に、至誠菩薩あるに非ずや。至誠の二字を看板にし、俠氣に富みて、多く金を有す。この菩薩を拜一拜すれば、必ず我等の爲めに蕭何の任に當るべしと。夜光命も裸男も、齊しく手を拍つて曰く、妙案、々々。

三馬鹿の陰謀、いよ〳〵實行せらるゝことゝなりぬ。然るに裸男事故ありて、豫期の時刻より後れて新宿驛に駈け付く。爲めに一と汽車後れたり。驛前の旗亭に團欒して、酒汲みかはし居たる一同の前に、恐る〳〵進み出でゝ謝罪しけるに、檜葉菩薩少しも腹立てたる樣子なく、例にかはらぬ溫顏を以て迎へ、且つ杯を屬し、久しく逢はぬが、無事なりしかと、情のありあまる一言、このやうに慈悲深き菩薩を山に伴ひて困らすなどゝは、さても何たる罪惡ぞやと、良心一時腦中に閃きたるが、今更中止すべくもあらずと、糞度胸をきめたる凡夫の心こそ淺間しけれ。檜葉菩薩筆とりて、半紙にさら〳〵と、豈不肉乎の四字を書し、これを何と讀むぞとの奇問。もとより智慧のなき裸男、豈に肉ならずやと云へば、よく字を見よ。

肉の字には一つ、が足らぬに非ずやと云はれて、裸男忽ち閉口す。至誠菩薩も、夜光命も、十口坊も、皆讀む能はず。檜葉菩薩微笑しながら、豈に憎(肉)らしからずやとの説明、一同あつとばかりに、呿いた口が塞がらず。菩薩更に筆を執りて、近作の俗謠を書して曰く、

我嫌ひ　なま意氣なま醉なま物識　なまで好いのは　なまこ生貝なま松魚

何より好いのは現なまぢや

一同、これは〳〵とばかり感歎す。菩薩、裸男を顧みて、この歌の對に、『我好き』を作つて見ずやといふ。裸男の如き馬鹿者の頭より、これに對すべき妙歌の、湧き出づべき筈は無けれど、出來ませぬと跳ね付くるは、餘りに無愛想也。いづれ、ゆつくり考へて見申さむと、お茶を濁したり。

驛より程近き千駄ヶ谷町に、六一菩薩と稱する洋畫の聖あり。六十一歳になりて、始めて一子を擧げたるを以て、斯く名づく。旗本の家に生れ、夙に勝海舟に識られて、畫を海外に學びたる老大家、西洋の筆致に日本的趣味を加へたる一種靈妙の畫風、當代に異彩を放てり。而して檜葉菩薩と最も親しき仲也。檜葉菩薩ふと思ひ出したる風にて六一菩薩を呼び寄せ、山行を勸む。六一菩薩、裸男を顧みて、高尾山の高さは如何ばかりにやと問ふ。勾配は九段坂よりも緩やかなり。路程は僅々十數町、先づざつと、九段坂を五倍したるものと見れば可ならむと云ひしに、半信半疑の樣子にて、ともかくも山の麓までおつきあひ申さむと云ふ。はゝあ、解めたり〳〵、檜葉菩薩の賢明、三馬鹿の陰謀をそれと見拔き、釣られたる風をして、そつと三馬鹿を出し拔き、麓にて待ち合はす相手にとて、六一菩薩を招きたるよな。その手は喰はぬと、裸男開き直り、六一菩薩は御老體也。然れども先生は天下の豪傑、而かも御年なほ壯也。よもや山を見て腰を拔かし、我輩も六一菩薩と一所に、などゝは申さるまじ

と念を押せば、男子の一諾、言ふにや及ぶと氣張り給ふ。

酒肴は蕭何の至誠菩薩が一切取揃へて汽車に乘る。中野、荻窪、吉祥寺の諸驛を經るほどに一望茫々、昔の武藏野の俤なしとせず。十口坊句あり。曰く、

武藏野の果や山あり麥の秋

蕭何はうと〳〵眠る。その齎せる兵糧の一部は、一行の口に分たれたり。國分寺驛にて、賣子の珍らしくも干香魚を賣るを見る。高尾山上に多摩川の香魚をあぶるも亦一興と慾張り、眠れる蕭何を起すも氣の毒と、裸男自腹を切り、そつと財布の底をはたいて、五六尾を連ねたる串三つばかり買ひたりけり。

淺川驛に下り、山麓まで車を走らす。山麓までと云ひし六一菩薩、俄に元氣づきて、共に上らむといふ。車夫一人をして從はしむ。大なる籠、其脊中に在り。一行の兵糧、其中に在り。車中にて買へる香魚も其中に在り。六一菩薩は思ひしよりも達者也。檜葉菩薩に待合せの相棒に擬せられたるを憤慨し、なあに老いても山位に屈するものかと、口には言はねど自から樣子にあらはれて、すた〳〵と眞先に行く。案ぜし如く、檜葉菩薩の方が苦しげ也。平生健脚を誇る裸男も、步調を緩めて、吃る鈍舌を鼓し、六一先生、畫になりますかナ。なる、一週間ばかりこゝに滯在して、名畫をかゝむ。こゝの淸水で、一寸休みませう。愛宕山と稱する處にて、また一と休み。半頃とおぼしき處にて、裸男さん、これが九段坂の五倍ですかと、江戸兒の六一菩薩、さすがに拔かりなき哉。

不動堂より飯綱權現への石段の、急にして長きには、六一菩薩も閉口の體也。檜葉菩薩は猶更の體也。世にも尊き檜葉、六一の二菩薩に、斯る憂目を見せて、腹の中にて舌を出す、馬鹿者の心の底ぞ恐しき。奧院へ行かむとすれば、檜葉菩薩忽ち立ちとまりて、出たりや出

たり、我輩はこゝにて待つとの泣言、六一菩薩も同じく、我輩もと立ちとまる。これを豫想しての三馬鹿の陰謀、勝つて兜の緒を締め、今暫時の御辛抱と、頭を卑うし辭を卑うして、やうやつと思を果したるこゝ高尾山の絶頂、西に富士、東に日光、關八州は寸眸の中に收まる。絶景だと檜葉菩薩が言へば、苦しんだ甲斐があると、六一菩薩の挨拶。それで馬鹿者も大願成就、あれが江島なりと指させば、檜葉菩薩ポッケットの中より雙眼鏡を取出して、身動きもせず、じつと見入り給ふ。江島のこなたの片瀬は、菩薩の夫人の病を養ふ處、生死尊卑の別はあれど、これやこの、碓氷峠ならぬ高尾山、大正の日本武尊と、裸男馬鹿ながらも、人に背いて、涙ほろ〳〵留めもあへず。折りしも夕陽既に沈んで、滿天の暮雲、忽ち光彩を發す。壯とも麗とも、何とも言ひやうなし。畫になりますかナ。なるとも〳〵。お蔭で始めてこんな絶景を見ました。夜光命鼻うごめかしながら口吟すらく、

氣位の高尾の山に上り來て我れ天下をば小とするなり

裸男も口吟すらく、

脚力の強きばかりを誇りかに阿呆の鼻の高尾山かな

飲みつ食ひつ、天然の宮殿天然の食卓に、浮世の外の美味を味ひて、さて暮れぬ程にと、本坊の前の茶屋に待ち合はすことを約し、六一至誠の二菩薩、車夫を伴うて先づ去る。酒盡きて、いざ下らむとすれば、思ひがけずも檜葉菩薩、ポッケットよりウヰスキーの瓶を取り出し給ふ。三馬鹿狂喜雀躍、難有し〳〵と舌鼓うちて、飲むは〳〵。

ウヰスキー盡きて、始めて氣が付けば、檜葉菩薩あらず。はゝあ、山の夜路を恐れて、逃げたナ〳〵。陰謀功を奏して、勝利も勝利、大勝利、醉つては益、馬鹿になる馬鹿者の口ぎたなく、さん〴〵檜葉菩薩を冷評しながら、如法闇夜の山路をたどる行手に、圖らずも諸の

一節、

かやうに候ふ者は、鞍馬の奥、僧正が谷に住まひまする客僧にて候。

諸に堪能なる檜葉菩薩、鞍馬山を聯想し給ひけむ。先生はまだ玆にかと打つれて、行けば行くほど、どうやら通つたことの無き路なりと氣が付き、行きつ戻りつ、漸く本坊の上に出で、おういく〳〵と二聲三聲、かなたにも、おういと答へて、待つ間程なく、うれしや闇を照らす車夫の提燈。

やうやつと最終の汽車に間に合ひて歸る汽車の中、檜葉菩薩問ひ給ふらく、香魚はどうした。一同始めて氣が付き、山上にても食はず。車中にも無し。天狗にさらはれしか。車夫にくすねられしか。はゝあく〳〵。

大森の春夜

梅見にと、松本道別をさそひ出したるが、東京近郊の梅は、多年何度となく見物したれば、今更、こゝぞと思ふ處もなし。龜戸の臥龍梅なら臥龍梅で、どうしても、臥龍梅を見ずば、承知が出來ずと思ふ間は、譬ふれば、戀愛の時代也。卽ち女と取ッ組合をする時代なり。執著心のとれぬ時代也。人間、一度は、この時代あるべし。されど佛の顏も三度、臥龍梅も、何度となく見物しては、最早、珍らしくもなし。何處でも好し、梅を見たし、あまねく探りて、梅の姿態をきはめつくしたしと思ふやうに進めば、戀愛を離れて、道樂の域に至りたる也。戀愛の上には解脫したる也。されど、道樂には執著する也。西鶴の一代男は、この域にうろつけるもの也。その一代男も、千人の女に媾ひたる上は、道樂の上にも解脫すべけれど、

惜しや、今一人の處にて死にたり。艶魂、定めて、翠帳紅閨の間に迷ふらむ。今一歩進めば道樂の上にも解脱する也。さらば、全く枯木冷灰となるかといふに、さうでも無し。人は死ぬると同時に、枯木冷灰となるべし。死ぬるまでは、熱なかるべからず。その熱あるが爲めに、之をもとへかへして、梅見に譬ふれば、あまねく、梅の姿態をきはむるでもなく、たゞ梅を見れば、それで、よき也。さは云へ、どこか目あては無かるべからず。蒲田の梅屋敷へでもとて、品川に電車を下りて徒歩す。

東海道の出口、むかしの繁昌熱鬧は、今更想像するまでもなけれど、市區改正はかどりて、市内は到る處、路幅ひろくなりたるを見慣れては、こゝは、何となく鼻をつく心地す。それも全くさびれたらば、まだしも、繁昌は、なほ青樓と海利とに残りながら、旅客は、すべて汽車と電車とに奪ひ去られて、今は全く東海道の出口の俤もなき也。寺の名は、何といひけむ、世に名高き仁王像をながめ、『本尊を拜め、仁王を拜むべからず』とある制札を見るにつけても、一つ本尊に聞きたし、我等の如く、たゞ仁王を見物して去る者よりは、仁王でも拜むものゝ方が、まだしも緣ある衆生ならずや。

東京六地藏の一なる銅製丈六の地藏の前に立ちて、またも見物するに、道別、わが袖を引いて、まア、あの偉大なる銀杏を見よ、君は、『東京遊行記』に、この地藏を記して、この銀杏を逸したりといふ。成る程、可成り大なる銀杏也。その銀杏の前に、白理斜に貫きて、青味がゝつた巨石立てり。このやうに白理のある石を祀るは、蒙古の風習なりと、佐々木照山の語るを聞けり。それが日本にうつりたるにやなど、道別煙草をふかしながら、ゝばし、見とれたり。

うれしや、左方に、海が見えそむ。女あまた、股の半までも海水に浸して、何か、ゝやく

ふ樣なるは、何を探るにかあらむ。見渡す海は平らかにして、鹿野山はぼうと霞みたり。立會川の川口に、凡そ百坪あまりの空地ありて、二三の小丘高まる。これは品川の砲臺と前後して、土佐藩のきづきたる砲臺の痕跡なるが、今は海苔干場となりぬ。頰かぶりして、海苔とり入るゝ老翁の後姿に、春の風そよ〳〵と吹く。

蒲田の梅屋敷に入るに、まだ二三分の開花なるが、遊客は、ぽつ〴〵あり。この園の名木なる翦綉梅は、さすがに、いつ見ても、風姿愛すべし。見なれたる處なれば、今更精しく記する氣にもなれず。たゞ東京の梅園中、最も庭園の美をきはめたる處なりとのみ云ひて止むべし。門側の茶店にもどりて、酒のむ。料理は無くて、たゞ海苔紫蘇、漬物のみの下物なるが、梅に相應して、風雅也。

店前に停車すべき筈の電車、いつも滿員なるに、さらば汽車にと、大森驛めざして行く。

田は縱横に龜裂して、水は全く涸れたるに便を得て、めざすまゝに、人家のある處にたどりつく。登張竹風を訪ふ。在り。よろこびて、樓上に延いて、酒くみかはす。この二三年こそ相逢ふことも稀なれ、いつも痛飲して元氣に歌ひしことは忘るべくもあらず。一つ發せよといへば、よし〳〵、義太夫を語らうといふ。いつの間に義太夫を覺えたるぞと問へば、この半年以來の事也、聞いてくれ給へ、野に遺賢はあるもの也、大和太夫とて、今は、この近鄰に隱居せる老翁あり、其藝、たしかに天下第一流也、師とするに足ると思ひて、往いて贄を執りて、其弟子となり、今までに四段ばかり稽古したりといふ。赤垣源藏を語る。さるにても、絃がなくては、物足らぬ心地すと云へば、わが妻も同じく弟子となりて太棹を學べり、余の語るよりも、妻の絃の方が出來がよしと、師が云へりといふ。益〻意外也。夫人としては珍らしき事なりと感歎すれば、家に在りし日、母より少しばかり習ひし事ありて、太棹では

なけれど、三味線の下地はあるなりといふ。いざ〳〵聽かせ給へと云へば、呼ぶ。未だ至らず。便所へのついでに迎へに行けば、十歳ばかりの令孃に、日記つけさせて、そばに督視せるに、平生のあつかも、さこそと思ひやらる。筆蹟太だ見事也。日記のたまりて一册となれるものを借り來りて、夫妻の前に讀む。其字と云ひ、其文と云ひ、實に間然する所なし。これは、天才也。定めて學校は一番か二番なるべしと云へば、いつも、首席なりといふ。われも子あまた持てる身、このやうなことにも、ふかく趣味を感ずるなり。いざ、これより拜聽せむ。

師の見立にて買ひしとて、三味線も、撥も、いと見事なり。夫語り、妻彈く。これや、琴瑟相和する家庭の樂生涯、語りしは太閤記の十段目、『涙にまことあらはせり』に至りて、これからあとがむづかしと一息つく。あゝ竹風あり、大和ありて、大森の天地、爲めに寂寞ならず。竹風の學問文章を以てして、自ら進んで義太夫語りの弟子となる。風流の趣を解せる哉。思ひがけぬ馳走に、酒も、ひときはの味を添へて、一刻千金の春の夜の月影も、今宵は大森の香世界にのみ照るかとぞ覺えし。

石田堤

『石田三成』一部、朝吹英二氏よりおくりこさる。名は知り居れど、面識は無き人也。氏の著書かと思ひしに、さにあらで、氏は、いたく石田三成に同情を表し、其事跡を世に明かにせむとて、渡邊世祐氏にたのみてこの書をつくらしめ、非賣品として、梓に上したる也。渡邊氏も、まだ不完全なりとて、自から謙遜して、稿本と題したるが、ひろく材料を集め、一一出所をしるし、態度眞面目にして、言ふ所、穩健也。三上博士も力を添へしとの事にて、

其序文も要を得たり。われ八九年前、一文をつくりて、三成の人物を偉とし、其關ヶ原の擧を壯としたることもありたるが、今この書に接して、大にうれしく思はるゝ也。

われ思ふに、好漢、奸漢を知るといふ言あるが、秀吉と三成とは、その好漢と奸漢也。所謂肝膽相照したるもの也。まして三成は所謂兒飼ひの身也。加藤清正も同じく兒飼ひの身なるが、これは武也、三成は文也。卽ち清正は軍人にして、三成は政治家也。政治家は正直一方では通らず。非常に才智のいることにて、策略をも要することなれば、人に誤解せられ易し。清正の如き正直なる人には、猶更也。三成が奸智の方の人か、良智の方の人かは、當時にありても、必らずや、一大疑問也。清正は、奸智の方に解せしなるべし。秀吉は肝膽相照して疑はざりし也。士は己れを知るものゝ爲めに死すと云へり。如何なる奸智の人とても、兒飼ひの身の上に肝膽相照されては、奸智も終に良智となるべし。清正は涙の人也。三成は理智の人也。殊に自信が强すぎたれば、或る一派の人には嫌はれしなるべけれど、それがまた一方には奸智ならざる反證ともなる也。良智とまでは行かずとも、奸智の側の人にはあらずと信ずる也。

さらば、關ヶ原の擧は如何にといふに、豐臣氏は、大阪に亡びたるにあらずして、關ヶ原に亡びたる也。されど、關ヶ原の戰なくとも、天下は家康に歸したりし也。三成の擧は、早ければ早き程、三成に利にして、おそければ、おそき程、家康に利也。何となれば、天下の諸將、日に益〻多く家康の恩にひきつけらるれば也。殊に家康は、大老や奉行と約せしことを破りて、私恩を施すに急なれば、關ヶ原の戰は、其名なしとせず。三成が一か八かの擧に出でたるは、尤も千萬にして、大に痛快也。家康あらば、天下は必ず家康に歸せむ。三成は唯家康を除くに急也。もし自から家康に代りて、天下を取らむと思ひしなるべしと疑ふ人あ

らば、そは、維新の際、薩長が德川に取つて代はらむとすと誤解せし、佐幕の諸藩の人々の見と同じかるべき也。

關ヶ原の戰やぶれしは、必らずしも三成の力の足らざるにあらず。その計畫通りに、輝元が秀頼を擁して陣に臨まば、勝敗は知るべからず。その事なくとも、秀秋をはじめ裏切する者が無かりしならば、勝敗は知るべからず。さは云へ、關ヶ原の戰に、西軍が勝ちたりとて家康が亡ぶものとも限らず。家康ある限りは、東軍やぶるゝも、天下或はまた四分五裂せしかもわからず。われ三成の爲めに西軍のやぶれしを悲み、天下の爲めに、東軍のかちしを喜ぶ也。

余は、少年の時より、近年までも、秀吉を好みて、家康を好まざりしが、この頃以爲へらく、秀吉は才智膽氣に於て不世出也。されど、人品の高き點に於て、雅量の大なる點に於て、德ある點に於て、家康には比ぶべくもあらず。秀吉は、どうしても、成上り者的也。家康は飽く迄も大人的也。一寸一例をあげても、武田氏の亡びし時、家康は馬場美濃守の女の美なるを聞き、鳥居元忠をして之を收め來らしむ。元忠自から取りて、家康に奉らず。家康笑つて咎めざりき。秀吉には、とても、これだけの雅量はあらざるべし。秀吉の死後、諸將多く家康に歸したるは、必ずしも家康が私恩を賣りたるのみにあらず。實際、家康は、天下の人心を得るだけに、德のすぐれたりし人也。

秀吉が小田原陣の時、三成は命をうけて、武州忍の城におしよせ、堤をきづきて、水攻にせしことあり。其堤の一部、今なほ存して、土人、之を石田堤と稱す。『石田三成』には、精しくこの事を記し、石田堤の寫眞二枚と地圖とを添へたり。われ始めて石田堤の事を知りて遊意うごき、直にひとり往いて忍附近を逍遙しぬ。

中山道の一驛たる吹上にて、汽車を下る。驛より忍まで一里餘。鐵道馬車之に通ずるを以て、路まがはず。運動をも兼ねたる旅なれば、歩してゆく。市街にとりつかむとする處、左に沼を見る。左折してゆく。小學校あり。門内に鐘樓ありて、鐘かゝる。寺は廢れしなるべし。行くこと二三町にして公園にいたる。小高き處に、四阿屋あり、櫻あり、梅あり。杉五六本、遠くよりも目につく。一隅に東照宮あり。大ならざれども、念の入りたる構造也。小學校よりこのあたりへかけての一面の地が、卽ち忍城趾也。

忍の城と云へば、關東有數の堅城なりき。四面に沼ある、一種特別の城也。八方に門を設けたり。卽ち行田口が追手にて東にあり。それより南にめぐれば、佐間口、下忍口、大宮口あり。持田口、西にあり。西北に皿尾口、北に谷口、東北に長野口あり。なほ精しく地勢を言へば、吹上は南に當る。熊ケ谷は、西凡そ一里半。西南一里强にして荒川に達し、北二里弱にして利根川に達す。忍沼より流れ出づる水、可成りの川となりて東南に向ふ。三成が水攻の計畫は、さもあるべきこと也。

三成は天正十八年六月四日、三萬餘騎を以て、押しよせたり。城主は、成田氏長なるが、北條氏に屬して小田原の城中に在り。忍の城には、妻と娘とあり。その妻は、名將太田三樂齋の女にて、美人也。娘も美なり。父の氣をうけて、女ながらも、部下をはげまし、死を決して、たてこもる。成田肥前守、城代たり。城下の婦女も、農商も、僧侶も、みな城中に入りて、總勢二千六百餘人、四面大澤の要害ある上にも、糧食多く、士氣振へり。

三成は、一寸攻めよせて見たるが、城南の丸墓山に上り、地勢を顧望して、水攻を思ひたち、西南より東へかけて、長堤を築き、荒、利根二水を溢らせたる也。僅々數日にてきづきあげたるにて、工事をいそぐ爲めに、賞を重くして、多く土民を募る。城中の農商も、夜ひ

そかに出でゝ之に應じ、多く金穀を得て城にもちゆく。奉行の人之を知り、訴へて曰く、これ敵に糧をもたらす也。詮索して首きらむと。三成曰く、いや〳〵、堤防が出來さへすれば、城兵はみな溺死せむ。金穀滿ちたりとて、何かせむ。城兵を斬らば、他の土民も恐れて逃げ去るべしとて、知つて知らぬ風をしたりき。かくて、見る間に堤は出來ぬ。水は溢れぬ。されど、城中では、さほど困りもせず。十六日大雨俄に至りて、堤の一方決れて、三成の人馬が却つて溺死せりと、關八州古戰錄に見えたり。三成のこの水攻は、秀吉の高松城の故智にならひしものにて、地勢上、さもあるべき所なれども、實際、功果は奏せざりし也。小田原にある城主の氏長、秀吉に應じ、部下をさとして、城を致さしめしを以て、城はじめて、三成の手に歸したる也。實に同月廿七日也。

城趾は見たり。これより石田堤に至らむとす。東にゆけば、可成りの市街あり。行田と稱す。忍の大字也。否、大部分也。その一端を過ぎ、忍川に沿うて、東南にゆけば、小丘の圓く高まるを見る。村童に問へば、丸墓山といふ。卽ち、當年三成が上りて、地勢を顧望したる處也。古墳にや。その上にのぼれば、成る程忍の城趾を見わたす。距離は、半里ばかりもあるべし。忍川は近く東麓を流る。山一面に灌木生ひたるが、上の方には、まだ若き杉多くつらなる。僧の名を刻める墓石、二つならべり。晩に向ひて風つよく、草木みな叫ぶ。陰雲慘として、斜日力なし。寒さには閉口せしが、古を懷ふには、至極相應したる天氣也。

丸墓山より西へかけて、堤あり。これも石田堤の一部分也。西をさして行くに、堤は絕えて、一簇の人家あり、埼玉村といふ。圓錐丘を中心にして、五百年内外の老杉繁り、丘上に念の入りたる淺間祠を安ず。萬葉集の歌などに埼玉の津とよめるは、このあたり也。もとは荒川がこのあたりを流れしなるべし。從つて堤防もありしなるべし。三成も一部は舊堤を利

用したりとの事也。なほ西へゆくに、とぎれ〳〵に堤あり。堤根村にいたれば、路堤上に通ず。これ中山道の三木村より忍へ通ふ路也。路傍に石田堤の碑あり。一枚の臺石の上に、長さ四五尺、ほゞ四角なる石立つ。慶應二年、堤根の庄屋増田豐純のたてし所にして、寺門靜軒の文を刻す。堤裂けて、小川流る。橋をわたりて、また堤に上る。このあたり、四五町の間、完全に堤の形を存す。且つ大にして高し。丸墓山よりこゝまで凡二十四五町。石田堤、今は大半はなくなり、あるも、完全には續かざれども、城をめぐりて、半里もしくは、一里以外に彎曲せし痕跡は見ゆる也。

關八州古戰錄には、三成の事をあしざまに書きたり。其要に曰く、水攻の事、功を奏せず。淺野幸長、命をうけて來り助く。城中に内應する者ありて、其由を幸長に報じ來る。幸長之を三成に報ず。三成曰く、他にも内應者あり。明日は總がゝりにて攻めむと。幸長等の諸將まことゝ思ひて攻めたるが、利あらず。三成の部隊は動かざりき。これ幸長の力にて城を拔きては我が恥辱なれば、わざと他に内應者ありとあざむきたるなりと。かくては、餘りに見えすきたる小丈夫也。斷じてこれ事實に非じ。

忍の城には、之に先んじて、上杉謙信もおしよせしことあり。されど、一寸圍んで直に去れり。一日、謙信、濠外を巡視す。城兵それと知りて頻りに鐵砲を放つ。謙信平氣にて通り過ぐ。城兵卑怯なりと罵る。謙信、馬の首をたてなほし、城に面して立つ。城兵頻りに狙擊す。皆中らず。大に驚嘆す。一人曰く、かゝる猛將は、普通の丸にては中らずとて、金の丸を三發までもうちたれど、それも中らず。感嘆して曰く、神化の名將なり、天の照鑑もおそろし、早々御通あれと。謙信、馬をすゝめて還る。味方のもの、みな冷汗をにぎれり。宇佐美定行、輕々しき蠻勇として、之を諫む。謙信曰く、汝の言ふ所、理にあたれり、されど我

れ聞く、活きむことを必とすれば死し、死なむことを必とすれば活く、苟くも信じて、躊躇せずば、火に入りても燒けず、水に入りても死せずと。故にわれ三昧して、踏みこたへたるなりと。武士たる者は、一たびこの謙信の域を經て、然るのち生死の上に超脫すべき也。

四五時間もぶらつきて、晩に吹上驛に戻る。發車迄には、三十分あり。輕裝の身に風さむし。腸胃わるければ、何も飲食せじと思ひしが、こらへかねて、驛前の茶屋にとびこみて、微醉を買ふ。笑ふべし、われ猶未だ物質以上に超脫するを得ざる也。

ゆく春

雨や、風や、時ならぬ大雪や、明治四十一年の春をあらしたり。友の松本道別、電車値上事件に反對せし爲め、兇徒嘯集罪に問はれ、控訴して、なほ免れず、上告して、終に斥けられる。あはれ、數年の歲月を囹圄の中に送らむとす。この二三年以來最も親しく交りたる友なり。常に來りて余を訪ひ、時に相伴ひて、郊外に遊べり。また相逢ふまでの名殘りに、共に小金井の花を見ずやとて、その訪ひ來れるを促して、家を出でたるは、四月十八日の、午後三時を過ぎたる頃。空は曇れり。

大久保驛より汽車に乘りて、國分寺驛に下る。歸りくる遊人の相連れるに、小金井への路、自から、それと知られつ。四時を過ぎたれば、行くものは、余等の外には無かるべしと思ひの外、相前後してゆく人も少なからず。凡そ半里にして、玉川上水に達し、流に沿うて下りて、小金井橋にいたる。これ小金井の中心なり。橋畔の一酒樓に上る。平生に似ずと、道別の笑ふに、平生は、野店にて事足らしたれど、今日は、君を送らむとするを以て奮發するなり、囊中錢あり、いざ大に飲み給へ。

われ、櫻の中にては、山櫻を愛す。而して、東京には、到る處、櫻あれども、山櫻あるは、小金井のみなり。われ小金井に遊びしこと、前後幾回なるを知らず。從つて、思出の多き處なる哉。近くは數年の前に、落合直文先生と共に、こゝに遊びて、この酒樓に上れり。室もこの室なり。「其後、間もなく、先生は病んで起たず。あゝ、流れゆく玉川上水は、もとの儘にして、而かも、もとの水にはあらず。欄によりて、むかしを偲べば、櫻の花びら、風に、はら〳〵と散る」。

今、われと對酌する道別は、やがて數日の後に、獄に下らむ身なり。我と同じく、四人の子を有す。雨の晨、月の夕、妻子の身の上を思ひやりて、いかばかりか斷腸の思をなすらむ。道別が爲したること、よしや拙なりとも、その市民の爲めに盡したる心事は、われ之を諒とせざるを得ず。殊に相逢ひ、相語るの度かさなりて、今は情誼に於て相合す。早稲田出身の中にても、ふるき人なり。國文を修めて、可成りの物知りなり。われさきに東京遊行記を著すや、多く道別と共に歩けり。道別は、市内の事にくはしく、われは市外の事に精し。市外の事は、道別われに問ひ、市内の事は、われ道別に問ひて、益を得しこと多し。昨年の秋、遠く都をはなれて、日光、庚申の間に放浪しけるも、思へば、早や夢の跡となりぬ。一昨年の春、道別は、文藝講演會を起しけるが、近く第十九回を催したるの日は、春雨蕭々たりき。嗚呼道別が獄を出づるまでには、講演會は幾度か開かれむ。されど、道別の禿頭疎髯は、演壇にはあらはれずして、空しく鐵窗の中に鎖さるゝなり。

日沈まむとして、暮雲忽ち色を生ず。欄外の櫻花も、ぱッと一時にはでやかなり。月琴の聲、三絃の聲、銅鑼の聲など、やうやく收りぬ。一人の女中、來りて酌す。うけ持の方は、あそこにと云ふに、ふりかへりて見れば、何をながめむとにや、年增、欄に倚りて俯す。來

よと云へば來る。年若き女中また來りて、人に背いて欄に倚るに、それをも呼び寄す。杯をめぐらす。最も始めに來りし女、よく飲む。歌へと云へば、『わたしや小金井の一重の櫻、八重に咲くきは更に無い』とい
ふ俗謠を燒き直す。『吉野山峰の白雪ふみわけて、入りにし人のおとづれもせぬ』の古歌を燒き直して、『吉野山峰の白雪ふみわけて、入りにし人の跡ぞ戀しき』とうたひけむ、同巧異曲なりとて、道別と相顧みて笑ふ。年長けたる女中を指して、三味線がひけるといふに、命じて彈かしむ。歌ふ喉もよし。杯その間に飛ぶ。風さむきに、障子を入れさす。燈火點ぜられて、興ます〳〵酣なり。歌ふ聲、笑ふ聲、三味線の聲、いとにぎやかに、春の夜は更けたり。
樓を下れば、月なし。萬朶の櫻も、闇には、色無し。たゞ上水の音のむせぶが如きを聞くのみ。『君去春山誰共遊。鳥啼花落水空流。如今送レ別臨二流水一。他日相思來二水頭一』と、高らかに唐詩を吟ずれば、相思うても、牢は出られずといふ。はら〳〵と顔にかゝるは、花びらにや。あゝ、花は、落ちて、流れて、ことしの春も、水と共に逝かむとするなり。境驛より汽車に乘りて、われは新宿驛に下る。道別は飯田町驛にてとて、なほ車に在り。われ、車窗より顔を出せる道別を顧みて、また明日か明後日かのうちに相會せむと云ひけるが、思へば、あゝ、それが、別れの言葉となりぬ。その後、相逢ふに由なくして、道別は、獄に下りけるなり。

小金井の櫻

聖武のみかど勅願せさせ給ひけむ、金光明四天王護國の國分寺すたれて、遺跡たゞ敗瓦を見る。歌舞の菩薩の戀が窪、香骨土と化し、烟華の地、野らとかはりて、傾城の松ばか

りぞ、むかしながらの色なる。井の頭の池ひろく境幽なる處、貫井辨天の小高く眺開けたる處、絶代の工事、野をつんざいて、清流珠を跳らすこと十數里、兩岸には吉野の山の山櫻、移し植ゑられて、その數千萬株なるを知らず。花はさくら、さくらは武藏の小金井と、上水の音に聞ゆる關左の名勝、水道の水の香しきを汲むにも、心は上流の花に飛ばずんばあらず。四月の半過ぎ、花のさかりにはおくれたれど、雜沓せざるを、その代りの取得にとて、萩の舍先生と共にいでたつ。

境の停車場を出でゝ、北にゆくこと七八町にして上水に出づ。櫻橋とて、小き橋架れり。兩岸の櫻、あたらしく植ゑられて、樹なほ小に、十四町の間、小金井の櫻の後をつぎたれどその吉野の種ならぬは、貂を續げる狗尾とも見るべくや。流にさかのぼりゆけば、若木つきて、老木あらはれ、小金井の櫻の眞のながめ、漸くはじまらむとす。

見渡す上流は、幾重の香雲、ふりかへる下流も亦幾重の香雲、人はその香雲堆裏をたどりゆく。上水の兩岸、みな櫻、幹古りて大に、その小なる者も合抱を下らず。たけ高く、枝しげり、清く碧なる一帶の水を夾んで、相合せむとして合せず、美人が紅袖をかざして相倚らむとするものゝ如し。誰か言ふ、流水の幅せまきに過ぐと。せまきが故に、兩岸の櫻相抱かむとする奇觀あるにあらずや。げに限りも知らぬ花の隧道、下ゆく水に映じて、上下みな花、堤の上には、青草氈を敷き、紅なるほけの花さきつゞきて、一種の花紋を添へ、見上げ見下すながめ、目もあやに、幾んど應接に遑あらず。

二列の櫻樹の外には、麥畑あり、茶畑あり、雜木林たちつゞき、茅屋點綴す。その間、到る處、よしず張りの茶店を構へ、茶烟輕く颺る處、小杜の禪榻ならで、赤毛布しける腰掛臺まばゆきばかりに立ちならび、客を呼ぶ少婦の聲さへなまめきたり。思ひしに違はで、花の

さかりは過ぎたれど、そよと吹く風にも、もろく散るさま、なか〳〵にあはれなり。秩父嶺おろしの春風、名残を雑木林にとどめて、櫻には強く吹かざれど、その雑木林の缺くる處は風の勢つよく、花片一齊に散亂し、空に知られぬ香雪紛々として面を撲ち、水に落ちて、水は忽ち繡錦となる。げに花のさかり過ぎならでは見るを得ざる光景とぞ喜びし。左岸の樹疎なる處、秩父の連山屏顔をあらはし、右岸には、箱根、足柄の山々手に取る如く見えて、その上の、八朶の芙蓉峰、倒に白扇を懸け、花にひときはの趣を添へぬ。

小金井の中心と覺しき小金井橋畔、杖をとどめて、青帘の飜れる柏屋に投ず。二層樓、櫻花に埋れて、前も左右もみな花なり。欄によりて酒をくみつゝ顧盼す。四面の花何ぞ美なるや。風ふけば、ひら〳〵と散る花片、時に杯中に落ち來たるも、心ありげなり。屋後の木立に和鳴する幽禽の聲耳だつばかりにて、樓下を過ぎ行く遊人は多からず。隨うて雜沓せず。物乞ふ三味線の聲、寂寥を破るも、亦惡からず。一杯又一杯、酡顔終に花と映發するに至りて、樓を下りぬ。

降りつゞきし雨、路上に微泥をとどめて、空さりげなく、雲だになき好天氣、日影ほかほかと暖きに、醉さへ加はりて、陶然として歩す。橋ある毎に路を轉じつゝ、行けども〳〵櫻未だつきず。喜平橋にいたりて渴を覺ゆるまゝに、咲き亂れたる櫻樹の下の茶店に休息し、酒にうけし花片を、茶にうけて飲むも、いとをかし。櫻橋よりこの橋まで、五十町にも餘らむ。花を觀つゝ徐歩し來りて、毫もその遠きを覺えず。その水上半里ばかりは、櫻樹なほたちつゞけりとかや。見下す水は、花をのせつゝ流れゆく。流れ〳〵て何處か春のとまりならむ。その流れゆく花に、人生の無常を感ずるも、事ふりにたれど、何となく心悲しく覺ゆ。嗚呼花開き、花落つる間に、今年の人は去年の人ならず。今年花を見る人、明年は何の

處にかある。花は散り易く、青春の夢は覺め易し。戀は流水と去りて、浮世の仇波に漂ふ人の身の、夢ならでは、また舊歡を追ふべからず。まことに運命をかこつことの益なきを知れど、酒さめて、涙の自から落つるを如何せむ。落花聲なく、流水語らず。花を隔てゝ聞ゆる法界節の聲も、哀れを催すばかり也。

月の隅田川

荒川堤へとて、川蒸氣にのりて、隅田川を溯る。つれは、福田瑞村なり。われ、この川蒸氣にて隅田川を上下せしこと、幾回なるを知らざるが、今、瑞村と共にするにつれて、十年の昔の、そゞろに忍ばるゝ哉。

われに、中村香峯といふ友ありき。その香峯は、瑞村と友たり。されど、瑞村と余とは、香峯を介して、人物性行を傳聞せしのみにて、未だ相識らざりしなり。

香峯は、好男子にして、多情多恨の才子なり。短艇の選手にて、常に墨陀に遊びけるが、その粹な角帽姿は、墨陀の教坊をうごかしむ。名だゝる美人に思はれて契りかはしけるが、いよ〳〵、卒業の曉にいたれば、浮世の風は、二人につらし。美人の親は、香峯の貧なるを嫌ひ、香峯の親は、美人の素性の賤しきを厭ひて、良緣あはや、破れむとす。瑞村は俠骨と金とを以てし、余は、貧なるまゝに、たゞ、舌を以てして、彼此の間に周旋して、事やうやく、まとまりぬ。而して、瑞村と余とは、未だ相逢ふの期なかりしなり。

都の殘暑をよそにせる水鄕の別世界に、香峯は、瑞村と余とを呼ぶ。勞を謝せむとするなり。かねて、未見の知己なる瑞村と余とを相逢はせむとするなり。溶々たる隅田川の流れ、櫻の葉越しに見えて、樓上、風いとすゞし。はじめて、瑞村と相逢ふ。互に胸襟を開きて、

所謂一見舊知の如し。三人とも、娯樂は、碁に於て、相一致す。負けのきにて碁を鬪はす。いつの間にやら、杯盤既に運ばれて、例の美人、志きりに酒を侑む。日暮れて、興ます〳〵酣なり。仰いで、明月を見る。此の如きの良夜は、得易からず。舟をうかべて、夜と共に語りあかさずやと云へば、二人踴躍して應ず。ひとり美人のみは、舟がきらひなりとて應ぜず。東坡の赤壁の遊にも、美人無かりしやうなり。酒と月とあれば十分なりと、早く、あきらめしが、妹は、船に醉はず、侍らせむといふ。妹、化粧して來る。其美、姉にゆづらず。老いたる舟子一人にて舟を漕ぐ。上流に溯る。月は白く、風は淸し。四面蒼茫として、往きかふ舟も無し。櫓の聲、舟の水を切る音、天地の寂寞を破りて、美人の顏ばかり光る。さしつ、さゝれつ、ます〳〵醉へり。

荒川と綾瀨川と相合する處、蘆荻しげれり。舟をその蘆荻の中にとどめ、舟夫をも呼びて杯をめぐらす。美人、年十七八。下ぶくれの愛くるしき顏なり。月下に酌する手、雪よりも白し。われには、既に妻あり。瑞村には、未だ無し。月下の冰人とならむかと云へば、赤らめたる顏を袖にうづむ。靑々たる蘆荻は、自然の屛風、四顧たゞ月を見る。涼風醉面を吹いて、快、言ふべからず。且つ飲み、且つ語り、興酣にして、惜しや、一樽の酒、既に盡きたり。

香峯の家に歸りて、また飲む。いつの間にか醉倒しけむ、曉にいたりて、漸く醒む。瑞村はと問へば、昨夜歸りたり、明日の午後は、ひまなり、今日の碁の復讐をなさむとす、俗塵を離れたる上野の茶亭に會合したし、傳語してくれよとの事なりといふ。われ碁を好むこと食色よりも甚し。さらば、大に鋭氣を養ひおかむとて、また眠る。さむれば、午を過ぎたり。香峯と共にゆく。瑞村既に在り。碁を圍みて晩に至る。瑞村、晩食しにゆかずやといふまゝ

に、諾してゆけば、われを不忍池畔の一酒樓に導きぬ。酒いたる。大小妓數名來る。あゝ、われ、圖られたり。昨夜舟遊の費用は、われこれを辨じけるが、江戸兒氣の瑞村、そのまゝにしては置かれず、言を余の好める圍碁に託して、余をこの酒樓に誘ひ出したるなり。

十年の歳月は、夢の如くに過ぎぬ。瑞村と相逢ふことも稀なりしが、この頃、同じく大久保村に住めるを以て、日夕相往來す。今日この行を共にし、舟中より墨堤を指點して、感いとゞ切なり。當年舟をとゞめし處、舊に依りて、蘆荻はや芽を吐きたり。あゝ、山水は移らずして、人事は非なり。われ、逝く水に對して、覺えず、涙をおとす。悲しい哉、香峯は、才子多病のたとへに洩れずして、其後、間もなく病みて逝きぬ。知らず、墨陀の二喬、今、在りや、無しや。

飛鳥山と西新井大師

心自づからうき立つ陽春の日也。新宿より、山の手線の汽車に乘りて、目白、池袋を經て、板橋にて下る。こゝは、中山道の入口也。こゝなる緣切榎の名、都人の耳に熟す。和宮御降嫁の時、東海道には、さツた(薩埵)峠あり、不吉なりとて、中山道を取られしに、此處に緣切榎あり。神木なれば、伐られず、板にて、圍ひまはして通られしとかや。今もなほ都人の迷信につけ込みて、その枯れたる榎を粉にして賣る者ありとは、滑稽きはまる話也。停車場の南、數十間、田の中に、長石立つ。近藤勇、土方歳三の墓と刻す。二人多摩川を隔てゝ、土民の子と生れしも、武をみがきて、幕末、稀に見るの勇士。勇が一つ年うへ、勇、長となり、歳三、副となり、心を共にし進退を共にし、一劍、幕府につくして、功勞あり。士籍に

列せられむとせしも、辭して受けず。麾下の士の腐敗せるを憤慨せしなるべし。あはれ、大廈倒れむとして、勇まづ官軍に捕へられて、此處に斬られたり。歳三は、のちに函館にて戰死せり。名詮自稱、勇は近藤まさり、智は、土方の方が少し上のやう也。

飛鳥山さしてゆく。板橋停車場より僅々十町餘の程也。瀧野川村より十條村へかけて、大なる製造場出來て、新市街ひらけたり。一寸見てもすぐ分る支那の學生五六人の中の一人、つと寄り來りて、帳面をとり出して、鉛筆にて、飛鳥山への路を問ふなるべし。われも、ゆくところ也、共にせむとて、つれだちて歩す。二人の日本の學生、ゆきちがひながら、富士見町邊の下宿の主人が、支那學生をつれ出したるものなるべしと、さゝやく聲聞ゆ。われを下宿屋の主人と見立てしなるべし。

飛鳥山にゆけば、櫻は、眞盛り也。遊客、茶店を滿たし、芝生に溢る。花よりも團子、上戸は酒、酒に赤くなりたる顏、櫻花と相映じて歌ふもあれば、三絃ひくもあり。踊の師匠につれられて、おさらひする少女の群もあり。花を見に來て、人に美裝を見られ、又他の美裝を見る。上には、物言はぬ花。下には、骸骨の上を粧へる物言ふ花。芭蕉も、花のふる日はうかれけむ、茫然として、あちこち見廻はす一人の老人、腰に瓢簞ぶらさげ、醉うてひとりぶら〳〵歩みけるが、醉うて歌へる一群の腰掛臺に、一禮して上り、老女のひく三味線にあはせて踊る。踊り終り、飄然一禮して去る。斯くまで垢拔するには、もとでもかゝりたるべしと、人にそむいて、ゝばし崖上より霞の中を見わたし、下りて、王子を過ぎて、豐島の渡さして、ゆく路の傍に、寺あり。東京六阿彌陀の一なる元木の西福寺とは、この寺の事也。六阿彌陀は、こゝが第一にて、第二は、沼田の延命寺、第三は、西ケ原の無量寺、第四は、田端の與樂寺、第五は、下谷廣小路の常樂院、第六は、龜井戸の常光寺、是也。常樂院を

のぞきては、東北郊にあり。彼岸には、六阿彌陀詣をするもの多し。これを東とし、西の阿彌陀とて、西郊にも、六阿彌陀、新に出來たり。芝西久保の大養寺、飯倉の善長寺、三田の春林寺、高輪の正覺寺、白金の正源寺、目黑の祐天寺これ也。

松本道別の東京名物志に據るに、足立の長者の娘、美也。豐島の長者に嫁しけるに、姑の虐待に堪へず、生家にかへらむとして、沼田川に身を投じて死す。五人の侍女も、みな同じく死せり。足立の長者、悲歎にたへず、六女の冥福を修めむとて、諸國をめぐり、熊野に詣でしに、靈夢によりて、靈木を得、之を海に流しけるが、歸り來れば、不思議や、その木、わが住む里の沼田浦に漂著す。巡化し來れる行基に請ひて、六女に配して、六阿彌陀の像を刻ましめたるもの、卽ち今の六阿彌陀の佛像なりとかや。

豐島の渡に、荒川をわたれば、沼田村也。六阿彌陀の第二の延命寺、こゝに在り。荒川のこのあたりを沼田川と云ひ、芝浦こゝまで入り込みて、沼田浦とは云ひしなるべし。一帶の土手は、熊ヶ谷土手也。このあたりは、八重櫻にて、未だ開かず。延命寺は閒却して、直に西新井の大師に至る。

川崎大師と南北相對して北郊第一の大伽藍、境內ひろく、前後に池あり、藤棚あり、梅林あり。後の影向松、偉大にして高く、東方の池に、一列の櫻、白雲をひたす。弘法大師の眞筆と稱するいろは歌を刻せる石碑も立てり。螺螺堂に上らば、眺望もあるべし。門前、十數の茶亭より客を呼ぶ嬌聲の中を過ぎ、數町步みて、西新井の停車場に來り、まつ閒程なく、汽車にのりて、直に北千住に下れば、既に黃昏也。こゝは、奧州街道の入り口也。ぶう〳〵喇叭を吹く圓太郎馬車にのる。途、吉原の近傍を過ぐ。春は夜櫻、秋は燈籠に、客をひきよす。今頃は、夜櫻が盛りなるべし。花川戶にて、馬車を下る。鐵道馬車出來て、圓太郎馬車

は、一隅に屏息せしが、電車出來てより、鐵道馬車、全く跡を絶ち、圓太郎馬車は、益〻却けられて、淺草千住間と萬世橋板橋間と甲州街道とに、わづかに餘命をたもてり。

淺草觀音の堂畔、牛肉店に酒し、飯して、身を電車に投ず。

南洲留魂祠

明治四十年六月三十日、第十一回目の文藝講演會を牛込の演藝館に開き、演說終りて、同所に小宴を催し、夜の十時過ぎに散會したるが、和田垣博士に要せられて、小日向臺なる其家にいたる。博士は、博識多才、一代に超絶す。洋畫や、日本畫や、書や、古物や、一々實物に就いて說明せらる。謠曲をもうたはる。終に手風琴をとり出し、曾て小栗風葉來りし時奏してきかせしに、風葉感じ入りて涙をおとしたることありき、今その曲を、君等の爲めにとて、一曲を奏す。如何にぞや、涙はこぼれぬかといふ。されど、かなしや、音樂を聽く耳をもたず。所謂馬耳に東風なるもの也。ありのまゝに、その由を言へば、さらば、今一つ奏せむ、耳を澄まして聞けとて、再び奏す。何となく、あはれには聞ゆれど、涙は出さうにも無し。曲よりは、却つて、聽官のにぶきに、涙をこぼしたくなりぬ。酒を侑められ、醉ひし上に醉ひて、辭して出でたる時は、既に午前三時を過ぎたり。世人普通に明日といふ處なるが、正しく云へば、今日也。今日、遠足の約あり。さらば、夜明けてとて、松本道別は、佐々木作樂と共に、本鄕の方に去り、山根饕餮は、余と共にして、終に余が家にやどりぬ。

まどろむ間もなく、覺めて待つに、道別來る。出立す。田中桃葉も加はりて、一行すべて四人也。

吾妻橋までは、電車に由る。徒步して、曳舟通りを行く。曳舟もがなと思ひしに、果して

曳舟あり。夫は舟にありて棹をとり、妻は岸上にありて、綱にて舟を曳く。兒は舟中に坐して菓子を食ふ。東京にはめづらしき景致也。木下川藥師の石標に導かれて川とはなる。左は藥師、右は江戸道とある石標二つ三つ見る。東京の近郊、舊き道標は多けれども、江戸の名あるは、他にあまり見當らず。生れぬ前の江戸の世にあひたる心地して、いとゆかし。路の竝木に、藥師の昔の繁昌も思ひやられて、寺内に入る。本堂も庫裡も、新築にかゝり、さばかり莊嚴の趣も無し。鶴の翼を張りたるが如き一株の松、富の松といふ八代將軍の命名に、空しく當年繁昌の跡を殘して、藥師の利益は、既にうすらぎけむ、參詣者、今は、まれ也。

仁王門を出でゝ、左折すれば、小丘の上に石龕あり。石の鳥居も立てり。これ南洲留魂祠にして、勝海舟のたてし所に係る。たてし海舟も、今は地下に眠れり。いと荒廢せるさま也。橋絶えて、ゆくに路無し。池一面水草生ひて、水を見ず。海舟や、南洲と肝膽相照せり。南洲が討死してより間もなく、即ち明治十二年にこの祠をたてたるは、知己に酬ゆる一片の涙のほどばしれる也。こなたの丘上に石碑あり。南洲自書の詩を刻す。其詩の終りに、『願留二魂魄一護二皇城一』の句あり。祠名もこれより出でたるなるべし。海舟がこの詩をえらびたるは南洲の寃を雪がむとの心もこもるべく、謀叛人を祀る辯疏の意も、ふくまるゝなるべし。裏面に、海舟の書を刻し、南洲が江戸市民の大恩人なる山を志るす。なほ別に、一碑あり。留魂碑をこゝにたてし時は、恰も旱魃に際せしが、石碑運び出さるゝに及びて大に雨ふり、建つる時にも大にふりて、農民雀躍して相喜べり、雲中に龍の姿さへあらはれたりなど、書き志るす。作者は、神官などにや、南洲の建碑と豪雨と何か關係あるらしく言ひなせり。こゝに來りて、最も感ぜらるゝは、海舟の誠心也。留魂祠、小なりといへども、澆季の世の中に、まことの朋友の道を語るもの也。

橋畔の茅店に休息す。店前に一道の川あり。めづらしさうに我等を見入る童子に問へば、一人の童子、新川なりといふ。水澄みたり。藻の花もさきたり。涼風青田をわたり、水をわたりて、いと心地よし。携へし握飯を食うて、なほ足らず。心太を買ひ、『なほし』を飲む。四人みな醉へり。陶然として中川の土手を歩し、諏訪野の渡をわたる。桃葉しきりに、薫風や〳〵とうなりたるが、あとの句がうかばず。田のこやしのくさきに、道別は、薫風やくとまぜかへす。

柴又の帝釋天に至る。三人とも、未だ人車鐵道を知らずといふに、導いて、發著所にいたりて、唯一目見物し、去つて精巧をきはめたる仁王門を見上げ、堂前の清泉に渴を醫し、堂後の庭に、花菖蒲を見る。これが何よりの御功德也。もとより堂内の本尊には、緣の無き衆生の身、村店の酒未だ醒めざれども、更に一酌をとて、此地に有名なる川甚に入る。水に臨める座敷に上るより早く、道別、桃葉の二人、衣を脫して、川に躍り込む。われ饕餮を顧みて、君は如何にと云へば、水泳を知らずといふ。われは二人の眞似して、水に入つて見たるが、冷堪ふべからず。直に上り來て、風呂に入る。一冷一熱、衞生上、よいか、わるいか、知らぬが佛。浴より出づる饕餮、川より出づる道別、桃葉を、待ちかねて團欒し、たすき掛けの女中に酌してもらひて、此料理屋獨得の川魚料理を肴に、酒のむ。松戸より來られしかとは、粗末なるわれらの服裝、どうしても、都の紳士とは見えざればなるべし。中れりと一笑して、且つ飲み、且つ眺む。三四室ある一亭、瀟洒にして、直に水に接す。江戸川溶々として流る。下流に、國府臺の林丘、鬱蒼として横はる。この日は、白帆見えず。唯一艘、下流にあらはれて、閒鷗の浮ぶが如く見えしが、滿帆に孕まれし風つよく、間もなく近く眼前を過ぐ。舟の水を切る音、高く江天にひびく。やがて又、遠く上りて、また白鷗の如し。長

江むなしく、悠々として天を浮べて流る。江山に對すれば、天地は人間にあらざれども、嚢中を思へば、心細し。熟醉を買ふほどの阿堵物をもたず。萬事の周旋は、一行中の世才に長けたる饕餮にまかせて、そのさしづのまゝに切り上ぐ。小岩停車場より汽車にのることゝ定めて徒歩す。日暮れたり。螢ほつ〳〵とび來る。

小岩停車場に著きて、上り汽車を待つ。片田舎の小驛の暢氣さ、事なきまゝに、驛長は少年の驛員を相手に、ゑかも、片馬はづしてもらつて、將棊をさす。われ見て以爲へらく、田舎の役所學校などにて、職務を妨げぬ限りにて、かゝる娯樂を爲さば、酒色などの誘惑をさくる方便ともなりて、至極よきことゝて、一寸覗きし處、下手將棊王より飛車を大事がりの手合なれど、退屈まぎらしに見物す。二三回勝負つきたるが、斧の柄ならぬステッキは朽ちもせず。下界の、ゑかも下手の勝負つくこと早く、たゞ、ほんの、汽車を待つ間の、二三十分の事也。

初夏の野

一　戸山の原

四月の末より五月へかけては、わが住める大久保の一村、到る所霧島が花盛り也。今、園を開いて、客を呼ぶ處、二つあり。もとは、五つ六つありて、躑躅人形さへ出來たりしが、名所も盛衰あるを免れず、大久保の花見も、年々衰へゆくさま也。

幡山子の訪ひ來れるを促して、中百人町の通りをゆくに、衰へたりと雖も、可成りの人出あり。うるさくて、たまらず。轉じて、戸山の原に出づ。廣き原一面に草生ひたり。ほつほつある木立、新緑を帶びて、目覺むる心地す。東京の附近、かばかり廣く、且つ、せい〳〵

したる處は、他に見るべからず。然るに、東京の人は、唯、大久保の躑躅園あるを知りて、すぐ、その近くに、この無上の遊樂園あるを知らず。遊人の來り遊ぶもの稀なるが、さすがに、畫家は自然に對する眼識ありて、そこにも、こゝにも、寫生するもの、少なからず。通りかゝるもの、寫生する人のうしろを取りまきて、畫を見入る。低き神田川の流域の彼方には、綠林相連りて、恰も峯巒の如し。射的の音も、折り〳〵聞ゆ。

二　泰雲寺の跡

神田川にかゝれる小瀧橋の袂、水に臨みて掛茶屋あり。新井藥師の賽路に當れる處とて、『招き』の手拭、軒にぶらさがり、掘拔井戸より溢れ出づる水の中に、心太ひたされたるもいと涼しげ也。左折して、泰雲寺の跡を訪ふ。三四年前に來りし時には、寺は荒れながらに殘りたり。去年來りし時には、寺は無くなりて、まだ畑とはならず、墓地は、その儘に在りたり。今來て見れば、麥畑となりて、墓地が何處か、とんと、わからず。耕す女に問ひて、漸く墓地に至れば、墓地も早や去年とは一變せり。數多き墓の中にて、その儘に立てるは、井上蘭臺の墓一つのみ也。他の四つ五つの墓は、悉く倒れ、その外の墓は、跡形も無し。無緣の上にも、寺が倒れては、墓の生命も盡きぬ。こゝも、日ならずして麥畑となり果つるなるべし。さるにても、この寺を建てたる了然尼の墓は、如何にか成りつる。

三　男嫌ひの了然尼

了然尼は、武田信玄の子孫也。父を葛山内記といふ。德川秀忠の女和子、後水尾天皇の女御となりけるが、了然之に事へて、埋木と名乘れり。和子は後、皇后となりけるが、崩じければ、了然は江戸に來り、武田壽庵の妻となり、子を生めり。されど、遁世の志止み難く、夫には妾をあてがひて尼となり、こゝに泰雲寺を建てたり。了然は、宮中に事ふる程の女と

て、才學もあり、容貌も美麗也。當時の名僧白鷗の門に入らむとせしに、白鷗許さず。燒火箸にて顏をやきて、決心の堅きを示しけるに、白鷗始めて許せり。かゝる名尼の遺跡が、全く消え失するは、世にも惜しき事ども也。

四　女嫌ひの井上蘭臺

今一つ殘れる墓の主なる井上蘭臺は、一代の儒者也。女嫌ひにて、家には一切女を置かず。他の家へゆきても、女があらはるれば、直に席を蹴立てゝ去りしとの事也。されど、死しては、如何ともし難く、その墓の側には、了然を始め、他の尼の墓もならびたりき。唯、了然は、夫に妾をあてがひて尼となれるくらゐなれば、これは男嫌ひの女也。女にして女に非ず。蘭臺と好一對の男女也。墓が相竝ぶは、至極面白き現象也。然るに、その了然の墓さへも無くなりて、蘭臺の靈は、さぞや、滿足なるべけれども、その蘭臺の墓も、今の模樣にては、到底、世に存在するを得ざるかと、憐れ也。

五　六十の戀

二三町ゆくに、豐島八十八箇所の四番なる寺あり。老婆の緣側に坐りて針仕事しけるに、泰雲寺の事問へば、あの寺は、もとから尼寺なりしが、先年、伊勢より來れる腹太き僧入り込みて、とう〳〵寺をつぶして仕舞へりといふ。尼の年はと問へば、六十歲。僧の年も同じく六十歲。その僧は、遠く去れり。その尼は既に死にたりといふ。あはれこの世の置土產、六十の戀に寺を換へたる也。

六　八十八箇所詣

新井の藥師さしてゆくに、市內より移轉し來れる寺少なからず。墓も移轉したるが、無緣の墓は、すべて石塔となれり。廢物利用もこゝに至れば、無慙の度を越して、むしろ滑稽也。

路に相逢ふは、多くは、善男善女、老人もあれば、子供もあり。手に手甲はめて、珠數さへ持てるは、問はでも著るき八十八箇所詣也。近年八十八箇所詣が大に盛になりたるは、結構なること也。八十八箇所は一半は市内にあれども、一半は、市外に在り。黄塵の中に住める東京市民が、市外に出でゝ新鮮なる空氣を呼吸するも、一種の御利益也。八十八箇所は、在來のものゝ外に、西新井大師の加はれる新八十八箇所あり。川崎大師の加はれる多摩川八十八箇所あり。やゝ遠くして、下總に相馬八十八箇所もあり。去年より新に豐島八十八箇所も起れり。偉なる哉弘法大師、萬古に活く。

七　新井藥師

新井藥師に詣づ。こゝにも、大師堂あり。紙札に埋められたり。堂畔の掛茶屋に腰かけ、きぬかつぎを肴に酒を飲む。門前の酒樓には絃歌の聲さかんに起る。中野の兵營と八十八箇所詣の盛になるとによりて、こゝは、年毎に盛に成りゆくさま也。

中野驛を經て、堀内祖師さしてゆく。この路、乞食多し。一人の男、何やら言ひて、廣告の紙をくばりてゆく。空車ひきて後より來れる車夫、おわかりになりましたか、あれは啞者ですよといふ。酒さめて渴を覺ゆるに、一店に就いて水を飲み、茶を飲む。幡山、われに向て、田舍の自然主義を見よといふ。小便にかこつけて往來へ出でゝ顧みれば、女は葉櫻の木にもたれ、男は、積みたる材木に腰かけて、何か語りあふ。女の顔は豐艶、男の顔は、はつきりと輪廓正し。君、あれを何と思ふ、既に出來たる中にて、女より、何かねだるに、男は困まつて居るにあらずやと云へば、その觀察はあやまらざるべしと云ふ。女のさま、如何にも志ほらし。されど、女は、求むる時にのみ、志ほらしく見せかく。その志ほらしきに、家倉をなげこみ、求めらるゝもの盡きては、お定まりの肱鐵砲、くはぬ前に早く目が覺めよ。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

府下の清涼境

當年、新田義興の妻が、池に身を投ずるに際して、衣を懸けたりと傳へられたる千代ヶ崎の衣懸松は、たび〳〵目黒に遊びたれど、いつも、數町の外より眺めたるばかり、ひと度はその場にゆいて見む乎と、目黒にて汽車を下る。

行人坂上、三叉街頭、鮨屋に就いて、千代ヶ崎は、いづこ、衣懸松は、いづこと問へば、それは、こゝより北の方、火藥製造所へ行く路を、五六町ゆきたる處なるが、二本ありたる松、一本枯れて、一本殘れど、それも今は枯れかゝりて、その地は、人の所有となりたり。頼めば、見せてくれるかも知れずといふ。いつも、五六町の外より眺めたる松也。わざ〳〵

人の邸内に入りて、見るほどの事もなしとて、あばし、烟草をふかす。主人は、能辯也。鮨をこしらへながら、もとこゝの處に、平井權八の墓がありたりと、問はず語りに言ひ出す。さらば、かの目黒不動の前にある比翼塚は、こゝより移したるものかと云へば、いや、あれは、唯、目黒へ客をひく爲めに、かりに造りたるまで也。余がまだ、けし坊主の頃記憶す、こゝに、平井權八、小紫の墓とて、ほんの粗末な石塔ありしが、寺すたれて、人の所有地となるに及び、それが、桐ヶ谷の安樂寺へうつれりといふ。桐ヶ谷の瀧へゆかむと思ふところなれば、ついでに行いて見むとて、一礼して立ち去る。

行人坂の中程、左に大圓寺あり。境内、眺望少しひらけたり。寺の横より後へかけて、丘腹に、たけ一尺ばかりなる小石像、二列になりて、數多くならべり。これ五百羅漢也。本所の五百羅漢を見た目には、見られたものにあらねど、石の五百羅漢といふが、東京では、一

寸目先が、かはりたり。江戸名所圖會に曰く、明和九年三月二十八日二十九日兩日の大火に燒死せし者の迷魂を弔はむが爲めに、ある人、これを建立すと。今に至るも、數は、ほゞ、もとのまゝ也。

行人坂の下、目黑川に架せる小石橋を、太鼓橋といふ。柱を用ゐず、兩岸より石をたゝみ出して橋とす。故に、横面より之を望めば、太鼓の胴に髣髴たり。故に世俗、太鼓橋といふと、江戸名所圖會に說けり。二十年前には、神田の萬世橋（太鼓の胴が二つになりて、眼鏡に似たる故、眼鏡橋ともいふ）の石橋が、まだ、珍らしかりき。その眼鏡橋もなかりし百年前の江戸名所圖會時代には、この橋の構造が、さぞや、珍らしかりしなるべし。

甘藷先生の墓より、向の岡の千代ケ崎に、ひよろ〳〵と孤立せる衣懸松を顧み、去つて、不動祠後の圓錐丘上、目黑より桐ケ谷、大崎へわたれる一面の新綠を見下し、不動堂を過ぎて、十町ばかりにして、桐ケ谷の安樂寺に至る。堂前に小池あり。健鯉時に躍りて、水面にうつりし山吹の花影亂る。池畔に、ひらたき石塔あり。連理塚と題す。寺僧に問へば、これ權八、小紫を改葬せるところなりといふ。目黑不動堂前の墓には、比翼塚と題す。こゝに改葬せりといふことは、鮨屋の言ふ所も、こゝの住持の言ふ所も、全く相同じ。目黑の方は、鮨屋の言ふ所が、果して、まことなりや否や。墓爭ひも、愚な事也。目黑に來りて、小紫の香魂を弔はむとする者は、遠からぬ路也。比翼塚より、こゝまで廻りて可也。されど、この絕代の佳人が、身は泥水に沈めても、心は蓮よりも淸く、二世を契りし男の墓前に、我れと我が身を殺し、香魂、劍光を追うて飛びし處は、目黑停車場よりわづか數十步の、行人坂上なりと知るべし。

寺の北鄰、少し奥まりたる岡の上に、氷川神社あり。ほゞ三抱ばかりの大松、路に當り、

樹木しげりて、清蔭、地に滿つ。丘腹より、水滴り出づ。これ桐ヶ谷の瀧也。夏は、清涼を追うて、來り浴する者多かるべし。大崎停車場より僅に數町の程也。

東京の附近、瀧と名のつくもの、この瀧を初めとし、目黑不動の獨鈷の瀧、角筈の十二社の瀧、王子附近の辨天の瀧、不動の瀧、權現の瀧、稻荷の瀧、名主の瀧、西郊に離れて、深大寺の瀧、等々力村の瀧、喜多見の不動の瀧など、頗る多し。もし、普通の瀧の觀念を有して、往いて看るものあらば、大に失望すべし。瀧とは云ふものゝ、いづれも皆、馬の小便ぐらゐな水量が、六七尺の高さより滴るまで也。看るべきものにあらずして、夏日浴すべきもの也。遠行の勞をいとふものには、諸處の料理屋に、水道の水をたらして、瀧となせる處少なからず。市外の諸瀑も、見ては、さッぱり、つまらざれど、三伏の炎熱に苦しめるの際、一日の閒を得て、來り浴しなば、成る程、これが東京の瀧の效能にて、瀧々ともてはやさるも宜なりと合點すべし。目黑の新富士にも瀧ありて、一時繁昌したれど、今はすたれたり。芝公園に新設せられたる紅葉の瀧は、浴するでは無く、看るやうにとこしらへて、失敗したるもの也。諸瀧の中、現今、最も、にぎはへるは、角筈の十二社也。新宿停車場より十町ばかり、淀橋貯水場の後に當る處也。

戸越の八幡宮に到る。そこより北品川へゆく路の、丘陵の盡くる處に、妙光寺あり。三方の眺望やゝ佳也。殊に、西方一面の新綠、人の目をこゝろよくす。東海寺を過ぎ、品川神社の岡に上りて、眺望を縱にし、御殿山を過ぎて、麻布の方に向はむとせしが、野中生、まだ泉岳寺を見たことなしといふに、さらばとて、泉岳寺にいたる。早や暮れかゝりて、參詣者は、みな散ぜり。義士の遺物展覽場は、既にとぢたり。義士木像堂もまたとぢたり。墓の門のみは、まだ開きてあり。入りて、一々四十七士の墓に、線香を供へて、未だ終らず。番

人來りて、去るを促し顔也。いそいで供へ終りて、門を出づると同時に、門とぢたり。門を出づれば、既に夜也。海の眺望ある小料理屋に晩食し、微醉を買うて歸る。

百草園

百草園の眺望は、世に名高きが、其往復の途上、即ち、往きには、國分寺驛に下車し、國分寺の跡を尋ね、府中の大國魂神社に詣で、分倍河原の古戰場を過ぎて、多摩川をわたり、還りには高幡不動を訪ひ、多摩川をわたり、立川の普濟寺にて眺望を縱にし、立川驛にて乘車すれば、げに趣味多き哉。

國分寺驛より、足跡、6字を下より上へかけて書きつゝ、西南さして十二三町ゆけば、國分寺あり。德川の世に出來たるものにて、もとの國分寺には非ず。さびしき寺也。本堂は、藁葺なるが、門は、トタン葺也。その門の樓上には、何か佛像があるやう也。左に石段ありて、下には仁王門あり、上には藥師堂あり。弘法大師の石像多くして、八十八箇所に擬す。木立四面をかこみて幽邃也。仁王の丹色なほ鮮かにして、藁葺の屋根の棟には、一八生ひ、尾花なびけり。畑の中に一株の老杉立てるあたり、巨石散在す。傳ふ、これもとの國分寺の殘礎なりと。草上に横臥して煙草ふかす。缺けたる布目瓦多し。同行の松本道別、好古の癖あり。こゝに來らば、必ず古瓦を拾ふならむと思ひしに、案に違はず、あちこち見歩く。恰も鷄の餌をさがすが如し。忽ち喜聲を發して、珍物を得たりといふ。見れば、尋常一樣の瓦片にはあらずして、一端に、唐草の模樣のつきたる也。

こゝより國分寺までは、二十二三町の程也。武藏野も、このあたりは、凸凹少なし。農家なくして、從つて高き木立もなし。雜木あれども低く、桑あれども低し。南は大山より、北

は秩父の群山までの山々、雲煙の中に隱見す。向岡一帶の長丘、近く横はる。その丘上、團扇の如き黄色の一團あるは、思ふに、目ざす百草園也。千年にもあまるらむ、一株の老欅の下に小祠あるを、右に見て、府中の町に入り、大國魂神社に詣づ。千年以上の老木多く、境内何となく崇高なるは、さすがに古き祠也。日露戰役記念碑は、野津元帥の書する所にかゝる。碑上の銅鵄は、あらずもがな。本殿は所謂神明造りの千木高知りて、丹色燦然たるが、その後に、偉大なる公孫樹高く天を衝き、梢までも黄葉を帶びて、まことに目さむる光景也。樹に小繪馬かゝり、賽錢箱さへあるは、例の女銀杏にして、乳を祈るにや。

府中より關戸さしてゆく路は、古の鎌倉街道也。分倍河原は、新田義貞が北條の軍を破りし所、江戸名所圖會時代には、田圃より遺鏃も出でたりし由也。志やれたる一構、小川を前にひかへて自からなる一種の垣となし、老松水に臨み、岩かさなり、古梅の槎枒たるが、其枯木自から燈籠の臺となり、天狗の團扇、白き花をつけたり。道別を顧みて、こんな處に棲みたくはなきかと云へば、棲みたくもあれど、とても長くは、じつとして居られずといふ。君はいかにと問はるゝに、覺えず、胸襟をひらきて曰く、棲みたくてたまらざりし時代もありしかど、今は、どうでもよし。自から思ふ、衣食住の上に超脫したるつもりなりと。

小さなる觀音堂の側に、銀杏黄了す。村童のいたづらにや、石地藏の首は缺かれて、首のかはりに、別の石を置かれたり。地藏は、本堂の奥にひそまずして、多く路頭に立ち給ふ。故に厄難多し。人にすれば、志士仁人也。田は刈られて藁塚多き一路、農夫馬背に腰かけ、手綱は鬣にあづけて、煙草ふかしてゆく。路傍欅の下に小堂あり、中に庚申塚を置く。堂には、穴のあきたる石、大小いくつとなく、ぶらさがる。多摩川畔なればなるべし。稻荷の朱の鳥居は得易し、穴のあきたる石を得るは、錢こそいらざれ、容易の事にはあらず。いかな

る、いはれかあると、耕す老農に問へば、お願をかけるなりといふ。頭腦も單純なれば、答へも單純也。

中河原の渡をわたる。一つですみたる筈なるに、又渡あり。水の分量多し。馬をひきゆく一人の農夫、煙草の火をかしたるより親しくなり、道別之にマッチ一箱與へしより益〻親しくなり、問はざるに自から說明して、この渡は、今年の夏の洪水にて出來たる也。田變じて川となり、流されたる家もありといふ。さらでだに、多摩川は河原がひろきに、こゝは、もとの倍以上のひろさになりたり。桑田變じて海となるとは、古人われを欺かざる也。百草園への路を問へば、かの黃色の團扇を指し、あれを目ざして行かれよ、一つ上の一の宮の渡を渡らるゝが、よかりき、この渡をわたらるゝは損なりといふ。別るゝに臨みて、なほ精しく敎へくれたり。難有うとて、頰被りの手拭をとりて、一禮してゆけり。思ふに、マッチの返禮也。農夫なればこそ、マッチの效能はあれ。養ひがたしといふ小人女子は、マッチでは、ゆかず。されど、女子には衣服、小人には金だに與ふれば、それで十分のきゝめある也。金を難有がらざるものにして、はじめて涙の價値を知るべし。

後より見れば、如何なる女も、美人也。山にとりつかむとするあたり、尾花のなよ〳〵とする處、老女一人、紅裾をあらはしたる女二人、つれだちてゆく。みな風呂敷包を負へり。接近すれば、老女ふりかへる。他の二女もふりかへる。見て驚きぬ。三人とも盲目もしくはかた目也。天野への路をとはるれど、われらも、不知案內の旅客也。傍に人家あり。聞いてあけやうと、道別行かむとすれば、いや私が聞きますとて、とぼ〳〵とたどりゆく。若き女の、おッかァさんと云ひしを以て判ずるに、親子なるべし。よく〳〵の因果と、枯野の末に一種の秋のあはれを覺えぬ。小なれど、ともかくも山也。谷あひに、農家ありて、鷄啼く。

柿の實、處々に累々たり。一人の女、竿を手にし、大なる柿籠を脊にしてゆくは、柿をとらむとにや。六七歳の小童も、母と同じく脊に籠負ひたるが、年齢相應に、いと小也。

黄色の團扇、今や眼前にあらはる。勾配ある路に、段はつくらずして、拳大の石をつらね鋪きたり。兩側には、茶の花白し。勾配盡きて、平地也。柱立せる一雙の榧、自から門を爲す。一株の松、頂は傘の如く、幾條の根、突起して、章魚の脚の如し。ひば、いくつとなく圓まりて、饅頭に似たり。例の黄色の團扇は、一抱だに無き小銀杏なるが、其黄色の他に紛ふものなきが爲めに、二三里の外にあらはるゝ也。別莊らしき家あり。梅あり、櫻あり、池あり。池の中に島あり。島の上に松あり。三方は小丘にとりまかれたり。松青く、楓赤し。もと松蓮寺のありたる處、寺すたれて、青木氏といふ富豪の手に歸したるが、天下の名所を私せずして、衆庶の縱覽に供するこそ難有けれ。右の丘より上りはじめて一周す。東西南北どちらを見ても、眺望ひらけたり。多摩川は脚下に、幾條の銀蛇を走らす。武藏野はたゞ遙に蒼茫たり。榛名、赤城、日光、筑波、いづれも明かに見ゆ。秩父の連山も見ゆ。大山の連山も見ゆ。たゞ富士のみは雲にさへぎられたりき。四阿屋あり、處々腰掛臺あり、古碑あり。終に西にめぐりて、八幡宮にいたる。老木ならびつらなる。その老木より判ずるも、數百年來の古祠也。

茶亭に休息し、鮎をさかなに道別と對酌す。道別は、早稻田出身の士にして、國文學を修めたり。國體の觀念つよし。東京の研究か、お得意也。昨年來、たび〳〵遊行を共にしけるが、郊外に至りては、われ一日の長あり。市内の事は、われ道別に問ひ、郊外の事は、道別われに問ふ。道別は名にあらずして、雅號也。東京市民の爲めに、電車値上げに反對し、爲めに罪に問はれしことは、世人みな之を知る。目するに、一種の志士を以てす。君も、路頭

の石地藏に類せずやと云へば、獄中、觀音經を讀み、觀音の大慈悲心をさとりて、心ますます堅し。願くは憂ふる勿れといふ。暮色催し來る。高幡不動の山に上ることも、立川の普濟寺に立ちよることも斷念し、直に日野驛より汽車にのることゝ定めたるが、囊錢に限りあれば、微醉にとゞめて立ち去りぬ。

百草園へは、日野驛より一里半、國分寺驛より二里半と稱せらる。立川驛よりの程は、二者の中間にあるべし。多摩右岸、一帶の長丘の中、不動山、天守臺、升形山、權現臺など、眺望よけれど、みな百草園に比すれば、遜色あるを免れず。日野の町に入りたるに、前方に上り汽車を見る。さらば、立川驛へとて、多摩川をわたる。川畔に出でゝ、はじめて、十六夜の月の上るを見る。夜烟、乾坤をぼかし、月光之を照して、見わたす光景に、さびあり、深みあり、流水めだちて白く光る。川上には、線路の鐵橋、月色の中に縹緲たり。長さ、六七町もあるべし。

この光景、ふかく魂にゑみけむ。この夜、夢むらく、鐵橋をわたらむとするに、シグナルに青き火點ぜられたり。これ十分間以内に、前方より汽車の來るゑるしなり。待たむか、進まむか、單線なれば、よくるに途なし。されど、枕木にぶらさがらば、さくるを得べしとて行く。二枚、もしくは一枚の板の上をわたることなれば、早くは歩かれず。下を見れば、二三丈もありて、水なし。飛び下らば、命はたすかるとも、大怪我をなすべし。前方より汽車の音す。幸に身をいるゝばかりの避難所あり。之に入る。汽車過ぐ。出でゆけば、また汽車の音す。戻るも、ゆくも、避難所へは程遠し。止むを得ず、枕木にぶらさがらむとすれば、汽車、橋をわたらずに、他にそれたり。また歩き出す。また汽車の音すと思ふ間もなく、後より汽車來る。枕木にぶらさがる餘裕も無し。怪我にて、命はたすからむとて、思切つて、

飛び下れば、案外にいたみも無く、怪我もなくして、目さめたり。朝起き出てゝ聞けば、近來稀なる大地震ありたりといふ。われは熟睡せしおかげにて、大地震は知らずにすみしが、手を胸にあてたりけむ、恐しき鐵橋を夢みたる也。

二子紀行

芳文、文衛もその生徒に屬せる、淀橋小學校の高等一二年生の帽子合戰を、戸山の原にて催すといふ。余が少年の頃には、無かりし遊戯也。どんな事をするか、どれ見に行かうとて、道別、桃葉とうちつれて行く。二隊にわかれ、一隊は白帽をかぶり、一隊は赤帽をかぶりて、互に帽の取り合ひをするなり。實戰にならひて、互に搜索兵を出し、一隊がまた幾小隊にも分れて、前後より攻むるなど、小兒相應に多少の軍畧あり。喊聲を發して相近づき、追ひつ

追はれつ、勇ましくして、毫も危險なく、至極面白き遊戯なるに、身體ぞく〳〵して、自から涙ぐまる。われ其の何の故なるを知らず。二回の勝負ありて、遊戯は終はれるさま也。

澁谷あたりの平野をぶらつくつもりにて、柏木を過ぎて、淀橋にいたる。橋のたもと、水に臨みて、前世紀式の料理屋あり。紫陽花さき滿ちて、水に映ず。

紫陽花や水に臨んで緣近う

辨慶が七道具脊負へる木像古りて、店もふりて、なほ辨慶飴を賣る。これも江戸時代の遺物なるべし。中野の町を後にし、舊神田上水をわたりて幡ケ谷の臺地にとりつき、トンチルをすぐ。上は、玉川上水也。水にじみ出でゝ、風すゞし。微吟すれば、聲、反響して高く、わが聲にあらぬかと疑はる。東京附近、路が川の下に通ずるは、こゝのみ也。

甲州街道を横切りて數町ゆけば、舊玉川上水ありて、橋かゝる。荻久保以東、さきに過ぎ

たるトンネルの上の上水新に設けられたるが、用水に供せらるゝを以て、こゝにも水はなほ絶えず。刑身は、五六尺の下に在り。川の上は、兩岸の樹木相合し、下の方にては、兩岸の薄相合せむとして合せず、姫百合、花を帶びて水に映ず。岸より岸へ、蜘蛛、網を張れるに、蝶一つからまりて死せるも、あはれ也。

はじめは、たゞ、澁谷附近をぶらつくつもりなりしが、道別も、桃葉も、ついでに多摩川まで行かむといふ。さらば、行かむ、志かし、嚢中、わづかに、一圓十錢あるのみ也、そのつもりにて、一圓十錢を利用する方法を講ぜざるべからずといふうちに、はや、さしせまるは、午食問題也。森嚴寺の前に、茅店あれど、午食にあつべきものは無し。小川ありて、橋かゝれる處、村童あまた、釣を垂る。橋欄に腰かけて見るうちに、あちに一尾、こちにも一尾、鮠を釣る。今一度小兒になりて見たしなど語りあひて行くに、姫百合遠く相連りて、田の中に、小川の路をあらはす。

姫百合や田中の川のいくうねり

三軒茶屋にいたる。右すれば、登戸街道なり。左すれば二子街道、卽ち大山街道也。二子街道の方には、電車通ず。こゝより多摩川畔まで、電車賃十錢也。三人で三十錢也。乘らうかと云へば、いや〳〵一圓十錢の利用法に非ずと否定せらる。半里ばかりゆくに、一茅店ありて、壽司を賣る。十錢の壽司をあつらへて、三人の午食に充つ。殘れる金は、一圓也。時は午後一時半也。

德利に百合をいけたる野茶屋哉

一里半ばかり行けば、臺地一落して、前に、いとひろき多摩川の砂磧あらはる。道別も、桃葉も、はじめて多摩川を見ることゝて、快哉と連呼す。二子の渡は、日野、關戸あたりに

比すれば、砂磧せまくして、水ふかし。平日は、渡賃一錢五厘なるが、今日は雨後水多く、且つ急にして、四人がゝりにて舟を操るを以て、一人前四錢をとられたり。やれ〳〵殘る所は、八十八錢也。二子には、龜屋とて、東京附近稀に見る、立派な旅店兼業の料理屋あり。されど一圓以下の金にては如何ともする能はず、川に臨める茅店の掛茶屋に就いて休息す。この春、電車はじめて通じける時、わざ〳〵電車にのりに來て、こゝに休息せしことあり。こちらでは記憶すれど、店の方にては、多くの客の事故、忘れたる樣也。鮎狩の事を問ふに、このあたりにては、三つの方法あるのみ也。曰く、投網、淺瀨に網うちて、手にて捕ふる也。曰く、鵜繩、網にてうけて、鵜の羽を繩につけたる者にて追ひ入るゝ也。曰く、瀨干、前日に瀨の上下に柵を張り、翌日、客來る時、上の方をせきて、水をほして、捕ふる也。

近日、家族、親類をつれて、來り漁せむことを約して、鮎を看に、酒二本のむ。看も酒もの足らねど、せむ方なし。勘定をきけば、六十五錢。少なけれど、五錢を茶代のつもりにして、七十錢拂へば、殘る金は、わづか十八錢也。

龜屋の前より右折して、土手の上をゆく。水勢つよく岸に當りて、蛇籠、いかめしく相連れる處、村民、男女老若、多く集まれり。水の岸に激する處、二本の青竹をたて、志め繩を張り、机の上に幣帛をたてゝ、一人の老僧、低聲にて誦經す。蛇籠の水際には、五六人の老人、口に何やら誦しつゝ、藁を、志ゆもく形にしたるものを流すこと、志きり也。なほ下の方には、若き男、あまた、水に入りて身體をあらふ。こは何事と聞けば、大山樣の祝ひ日なり、大山詣をなすもの、かくして、垢離をとるなりといふ。相州大山の雨降神社は、關東に名高き處也。夏は、參詣の道者多し。その道者たち、斯くして、身を淸め、不淨を食はず、女にも近かず、往きは殊勝なるが、歸りは、いづれ、厚木か、もしくは、まはり路して平塚

かに、財布をはたくなるべし。さるにても、成田詣のものが、船橋を八兵衛と稱するよりは大にまされり。大山は、今は、神社の方なるに、僧侶が祈禱するは、維新以前の神佛混合の俤が、なほ殘れるなるべし。

路は、多摩川と遠ざかりて、連亙せる小山に接す。上には松林あり、檜林あり。百合もをり〳〵見ゆ。多摩川より引ける用水、ゆるく流れ、水を蔽へる合歡木の花、傾ける日に映じて、あざやか也。武藏野も、こゝにいたりて、一種の景致を見る。登戸と二子との中央とおぼしき處に、新渡と稱する渡あり。この日は、水增せるために、二錢五厘、都合七錢五厘。五厘は、おまけにして、八錢を拂ひてわたる。かく三人の賃錢は拂ひたるものゝ、道別と桃葉とは、泳ぎたくて、たまらず。衣帽は船にあづけ、今に深き處があるか〳〵とて、船を押したるが、二子とはことなりて、ゆけど〳〵、水は腰以上に達せず。泳がうにも泳がれず。

これなら、渡舟にのるではなかりしと、くやめど、かひなし。砂磧には、川原撫子、花をひらけり。月見草も多し。一本の月見草を根ながら掘り取り、卷煙草の袋の殼に、砂と共に、根を入れて、もち來る。こゝより家までは、四里もあるべし。日はくれかゝりぬ。囊中にはたつた十錢あるのみ。煙草つきたれど、買ふに由なし。

登戸街道にいでゝ、青山の方に向ふ。暮靄林をこめて、蜩の聲、聞え始む。空は、白雲漠漠たるに、日光映じて、微紅を帶ぶ。地の陰氣になりゆくに引きかへて、空は、はなやかになりゆく。十日頃の月にやあらむ、雲端に見えつ、かくれつして、益〻にぎやか也。路、品川用水と交叉する處より左折して、甲州街道に向ふ。農家の火、ぽつ〻〻、林間に見えそめて、既に夜也。雲は、いつの間にか散じけむ、半輪の月、空にさはやか也。ふと、桃葉の手にせる月見草を見れば、いとしや、莟は開いて、花となりぬ。

もちながら月見草咲く薄月夜

三人とも、空腹也。餓ゑては、人も動物也。他の事は思はず、殘れる十錢を利用して、壽司を求めむとのみ思ひて、甲州街道に出でぬ。やれうれしやとて、兩側を見て歩くに、物を賣る家はあれど、壽司屋は無し。ぱッと火のあかりたるは、飲食店かと見れば、理髪店也。せめて、うどん、そばなりともとて、その看板ある家に入りて問ふに、賣りきれたりと、ことわらるゝこと、三四軒に及べり。さらば、菓子にても、よしとて、げに、餓ゑては、食をえらばず。終に、菓子屋に入りて、パンを九つ買ひ、之を三分して食ひつくしぬ。殘れる一錢にて、そら豆を買ひて、路々食ひ、腹は張らねど、少しは、力づきたり。かくて、家にかへりつきたるは、十時也。細君が氣をきかして、風呂をわかし置きけるに、一浴して、酒し飯す。空腹には、粗食も、珍味也。この日、饑錢空しくして、不自由なる思のみしたるが、家にかへりて見れば、よしや十金をつかひて、豪興を買ひ、安樂に電車にて、かへりたりとて、いづれも過ぎし夢の跡。よろづ慾張りて、我の滿足を得むとするは、人の向上には缺くべからざるも、一方には、不平、不滿、苦痛、煩悶、之に伴ふ。不自由の趣味を解しなば、人間到る處、樂境あり。富めるが必ずしも幸福にあらねば、貧しきが必ずしも不幸にあらずとは、必ずしも、貧故の負惜みにはあらず。隨分豪遊もして見たる揚句に、自から悟りたる所なり。殊に書生時代の無錢旅行の事を思へば、今日の遠足の如きは、これでも、よッぽど紳士的なりと自分一人で悟り顔して、疲れたる身の夢もやすらかに、ぐッすりと寢入りぬ。

春のひと夜

人生の遭逢、夢乎、眞乎。三人ながら住みなれし花の都を出でゝ、山陰道のかたほとりに

教鞭を執り居りしときは、一年とたゞぬ程にまた同じく都にて落ち合はむとは、夢にも思はむや。余の都に還りしは、去年八月の末、山外の還りしは、今年一月の末、雨江の還りしは二月のはじめ、彌山の麓、簸川の湄、共に袂を聯ねて逍遙し、共に團欒して杯を飛ばしゝ昨日の歡樂、一場の夢と消えて、還るもなつかしき花の都。雙鞋の下に蹈破せし古雲州の山川數百里の外に隔りて、重ねて逢へる三人は、舊によりて好在なり。陽春四月、東風のどかに柳櫻をこきまぜて、都は春の錦の巻、三人相會し、曾遊を追懐して、遊意鬱勃たらざるを得むや。一夜、酒酣にして雨江盃を投じて曰く、人生いくばくぞ、時に及んで行樂せずんば、清風朗月を如何せむ、去年の晩春、夜もすがら宍道湖畔をたどりし幽興、わすれ難きに、いざこれより起ちて、都門の外に逍遙せずやと。年少血氣の山外、手を拍ちて、大賛成なりと叫ぶ。われも旅行にかけては目のなき男、相談忽ちまとまりて立ち出づ。二十日頃の月おぼろなり。

新橋より汽車にのりて、横濱につきたるは、夜の十一時半なり。酒さめて喉かわくに、麥酒店に入りて、且つ渴を醫し、且つ醉を復し、金澤さして徒歩す。市中は燈光晝の如く、人の往來なほ繁かりしかど、場末に至れば、人家悉く戸をとざし、絶えて往來するものなし。路は田畝の間に通ず。春月一痕、くもりも果てず、四山、夜靄の外に幽かなり。

夜の旅にこまるものは岐路なり。横濱より金澤に至るの路は、さまで岐路あらず、且つ雨江も曾て通りたることあり、余も通りたることあれど、一里あまり行きたる處にて、路二條に分れ、夜色のおぼろなるに、方角をわくこと能はず、前蹤の記憶も失せはてゝ、はたとまどひぬ。三人頭をあつめて考へたれど、文珠の智慧も出ず。側に家あれども、すでに寢しづまれるさまなり。起して問はむか、さりとは氣の毒なりと躊躇せしが、外に策なければ、終

に意を決して、雨戸たゝきて路を問ひしに、忽ち老翁の聲は、内よりひゞきぬ。げに田舍の人のまめやかなる、うるささうなるけはひもなく、いとねんごろに教へてくれぬ。教へられたるまゝに進みゆきしに、いつしかまた路をあやまりけむ、坂路一つ越ゆれば、屏風が浦前にあらはる。脚下は杉田村とおぼし。さては金澤に出でずして、杉田に出でたるなり。

田畝の間を行きつくして、梅林に入る。林中の古寺は東漸寺なるべし。華鯨眠りて音なく、娑婆たる朧月の影に、梅の花それともわかねど、をり〳〵暗香の鼻を襲ふは、萎み殘れる花あるにや。既に幾回となくとひたれば、こたびは、よそに見て過ぎむとせしに、はからずも迷ひ出でゝ、反つて路を失へるを喜びぬ。嗚呼この朧月、この暗香、苟くも風流の味を解するものゝ、等閑に付すべき景ならむや。

脈々たる幽香、微風の醉面を吹くも、亦惡からず。茅屋や、樹木や、夜靄の中に趣を添へ、打ち渡す海は淼漫として、なぎさにのたり〳〵と寄する波の音、ひとり高きまでに夜はふかなり。われらは暗香に迎へられて、この梅花の村に入り、また暗香に送られて梅花の村を出でぬ。小高き坂路より今ひと目とふりかへれば、一望白模糊として、一犬の聲、遙に月下に高かりき。

一路丘上に通ず。ゆくこと一里ばかりにして、路は岡を下る。田開け水流れ、處々に茅屋を見る。時計を見れば方に午前三時、怪雲空にみちて、やさしかりし朧月夜は、變じて物凄き光景を呈し來りぬ。たゞし足をやすめむとて、露滋き路傍の石に腰かけて、煙草ふかしなどする程に、鷄鳴はや幽篁の中より起りぬ。板橋未だ霜を見ざれども、茅店の月に鷄聲を聞く。人は庭筠詩句の中にありて、自から興あるを覺ゆれども、草木も眠る丑三の空、冷氣の骨に徹するに、久しく休息すべからず。今更に風流の寒きを覺え、疾行して暖を取りぬ。

十字路頭また取るべき路を判じかねて、一茅屋を叩き起して路を問へば、左の路を取り、圯橋をわたりて十丁ばかりゆけば金澤なりといふに、今ひと息にて、溫き衾の中に臥するを得るかと俄に勇みたちぬ。その答へし聲は、四十餘りの女とおぼし。たゞ物好きの益もなき夜行に、一人の翁と一人の媼との眠を妨げしこそ、げに罪深きわざなりけれ。この路ははじめて通る路なり。能見堂やいづくにある。筆捨松やいづくに立てると、右方の小山をのみながめつゝ進みしに、はからずも、はや金澤の入海に出でぬ。左方の橋は瀨戸の橋也。右手の高樓は、二三回宿りたるとある旅館千代本也。時は四時半、鷄鳴しきりに曉を告ぐれども、人は未だ起きず。こゝは宿屋なれば、氣の毒とは思はず、叩き起して宿を乞へば、こはそも如何に、室ふさがれりとのみ、ねぼけ聲にて冷かに斷られたるぞ是非もなき。店頭に幾度か額づきて、またどうぞお近いうちにと愛嬌ふりまきし口より、斯る情なき言葉を聞かむとは思ひかけきや。『宿かさぬ人のつらさを情けにて、おぼろ月夜の花の下臥し』と蓮月尼の咏じけむ花ならずとも、老松たちつゞける琵琶島の一角、天女の祠に憩はむとて進みゆく。林下寂として、天未だ明けず。殘月の光力なくも松の露にやどれり。天女の祠は小にして膝を容るゝに足らず、松の根に腰かけて休息す。金澤に至らば、溫被の内に横臥せむとの希望畫餅に歸して、いよ〳〵風流の寒きにふるへぬ。

墜露聞くに聲ある老松の下、三人相對して言なし。天地なほ夜色につゝまれたる中に、灰色なるは空、うすみどりなるは入海、その中間の一帶の黑影は、野島也。江上にたゞ一燈闇を破りて話聲の聞ゆるは、夜泊の舟なるべし。睡を忍べる少女の眼の如くまたゝきし明星の光漸くうすれゆきて、空はいつしか白味と赤味とを帶び來り、はてはおもに紫色を帶び來りぬ。水の色はいよ〳〵みどりになりぬ。ふとん著て臥たる如き野島の黑影、倒に水にうつり

これ天、これ水、上下相映じて、とみに目覺むる光景を呈し來りたれども、曉の寒きに、火の氣のみこひしく、起きたる人家やあるとたどりゆけば、一軒の木賃宿はや戸をあけて、主婦かひぐ〳〵しく、炊烟の上るかまどの前にたちはたらけり。されどその家のむさくろしげなるに、入る氣にもならず。向側の物賣る家のやゝ見よげなるが、店をひらき居たれば、玆にて入る。うちつけに火鉢を乞ふことも出來ねば、酒かひて、のみて休息す。起きて居たるは、主婦とその娘とにて、男は見えず。いづくの家にても男はらくをして、女のみ働くものにや。われらのふるへ居るに、氣をきかして、かまの下の火を火鉢にうつし來れる人情、火よりも溫かに覺えて、漸く蘇生の思をなす程に、夜は全く明けはなれたり。宿屋の起きむはまだ程あるべし。こゝに待つ時間にて、鎌倉に行かむとて發足しぬ。

界地藏を右に見て、のぼりゆく朝夷の切通しの頂上には、一軒の茶店あり。そこにて茶を

と、喘ぎ〳〵山坂を上れば、茶店はありて人は未だ出で居らざるに、少し失望する間もなく店の主、鎌倉の方より道具背負ひて上り來ぬ。岩隙よりわき出づる清水に、口そゝぎ顏洗ひなどする程に、早や湯もわきぬ。その手早きに驚きつゝ幾杯の茶をのみて、一道の溪流と共に鎌倉に下りゆき、八幡祠前の旅館に投じて、酒し、飯す。金澤にては溫被を思ひしも、夜あけて暖かに、腹はり、醉を帶びては、ねむる氣にもならず、江の島へとてたち出づ。ほかほかと暖き春の日なり。夏草や武夫どもの夢の跡といへる芭蕉の俳句の、處はかはれど、こも相應しき古跡の地、その俳句を刻める石碑の立てるあたりは、家はなくて、草のみ繁き處なりしに、數年見ざる間に、人家多くたちならびたり。嗚呼都すたれて野となり、野また市街となりて、長へに循環するは、竟に何の意味ぞや。地下の巨頭公、呼べども起たず。三代の霸業、たゞ山河を見る。止んぬる哉。

稻村が崎を左に見、七里が濱の浪打ぎはを行き盡し、更に沙地の上の長橋をわたりて江の嶋にいたり、崖に倚れる旅館に投ず。落ちつく處は、こゝなりと思へば、夜來ねむらざる身の、氣ゆるむにつれて、睡氣催し、蒲團を呼びて打臥す。さめて午食し、午食終りて眠り、眠さめて晩食し、晩食終りてまた眠りて曉に達しぬ。あはれ春の二夜、一夜は歩きつくし、一夜は眠りつくしぬ。その眠りし一夜は、夢にも周公を見ざれば、記すべき事なく、何等の罪もなし。眠らむ哉、眠らむ哉、五十年の一生、覺めては愁の多きに堪へず。目をあけつゝも眠らむ哉。

野田八村の桃花

江戸川の左岸、二三里をへだてゝ、流山は味淋酒にあらはれ、野田は醤油にあらはる。口には、味淋酒と思へど、野田は、八村みな桃なる一大美觀をひかへたる處也。

あかつき、野田の宿を出でむとすれば、春雨蕭々たり。學生の頃、旅行するに著慣れたるもの也、傘よりはとて、菅笠とござとを買ひて、雨を凌ぐ。冷金子は、蝙蝠傘をもてり。

町の北端に愛宕祠あり。富家の多き町の鎭守とて、凝つた構造也。境内を愛趣園と稱す。噴泉を瀧にたらして、小池あり、藤棚あり、種々の老木あり。野田の町に相應したるだけの公園也。祠後に、勝軍地藏あり。近き堤臺には、子育地藏ありて、その名の如く、子育の御利益ありしが、いつしか、徴兵除けといふ、不屈千萬なる御利益加はりて、可成り繁昌せし由也。されど、いよ〳〵日露戰爭はじまりては、徴兵除けでは、間にあはず、こゝな地藏尊は、鐵砲除の御利益ありとの事にて、祈願者多く、いよ〳〵御利益あらはれ、愚俗が隨喜渴仰の涙したゝりて、幾萬圓の寄附金となり、やがて、改築せられて、裏店ずまひの地藏尊、

一躍して、大廈高樓にうつりがへた給ふべき由は、金額と寄附者の名とを記せる張机の夥しきにても知られたり。されど、知らず、戰爭すみても、なほ繁昌するや、否や。數町ゆきて左折し、桃林の中をゆけば、櫻の竝木の奥に、金乘院あり。仁王尊滿身に紙丸をうけ、左のは、うんと、りきみながら、あはや、倒れむとす。寺門にある佛像を、仁王と云ふ。二王とも書く。必ず二つあり。共に金剛力士と稱し、又密迹金剛とも、金剛夜叉とも稱す。金剛力士の外、四天王の像ある處もあれど、概して金剛力士なりなどゝ、知つた風して、同行の冷金子の問に答へつゝ、寺へは入らず、山門につきあたりて、左すれば、集樂園に達す。これ實に關東第一流の公園也。

浮世は金也。野田の一醬油製造屋の隱居の發起にて、近年開かれたる處、座生沼に臨める高臺の竹藪變じて庭園となり、櫻あり、松あり。所謂八村の桃を見渡すといふ圓錐丘も沼畔に聳ゆ。座生沼は、長さ一里、幅は、五六町なれども、規則正しき長方形ならずして、出入あれば、眺望は、可成りにひろし。四周の岸高くして、こゝも、『山の湖』の趣を有す。崖を下れば、遊覽の舟あり、以て沼に浮ぶべし。鴉、くゝと鋭く鳴きて、諸處に浮きては沈む。俗にむぐッてうといふ鳥也。この鳥、都に近き處にては、井の頭池、三寶寺池などにも棲めり。園は、ひろからねど、瀟洒也。休憩宿泊に供する亭もあり。『山の湖』の趣ある沼と眺望の佳とを、こゝの特色とす。余は、水戸の常磐公園よりも、むしろこの園の自然の趣あるを取らむとす。

桃の八村とは、清水、堤臺、中野臺、吉春、谷津、五木、岩名、築比地、是也。築比地は少し離れて利根川の右岸に在り。他の七村、沼をめぐる。崖下に渡舟を招きて、岩名村にわたる。中流微雨の中に顧望す。幽にして靜なる哉。八村の中、岩名は、土地高燥、江戸川と

座生沼とにはさまれて、茅屋ぽつ〳〵あるのみにて、幾んど行人なき塵外の別天地、のばさば一方里もあるべき處、見る限り、行く限り、すべて桃花に埋めらる。實に天下の壯觀也。越ヶ谷や、中山や、市川や、こゝを見れば、何でも無し。斷言す、野田の桃を見ずんば、未だ桃花の觀を談ずべからざる也。

堤上に出づれば、江戸川、溶々として流る。對岸一面の桃花は、八村の中の築比地也。白帆、その間を往來して、一種の趣を添ふ。堤つきて、人家の間に入り、新宿の渡をわたる。東京の新宿は、ちんじゆくと濁れど、こゝは、ちんしゆくと澄みて訓む。されど、渡しの水は、澄んでも居らずと、駄洒落云ひつゝ、新宿の橋を過ぎて、西金野井村に至る。森をひかへ川に接して、香取祠あり。土人、かんどりと訓む。入口の前に、大なる欅あり。まはり、六抱に餘りて、且つ高く、堂々たる者也。神額は、蒼海伯の書、石碑に、本居豐穎氏が社司の功勞をのべたる文をきざめり。こゝな社司は、世才のある男と見えたり。

川俣東京間を往復する汽船、こゝにも立寄る。乘りて、江戸川を下る。微雨に、所謂午後の風さへ加はれるに、沿岸をながめるとも出來ず、込みあへる乘客の中に、ちよこなんと坐る。煙草ものめぬ身也。地圖をひろげ、あきては、人の話しあふに、耳かたむけて慰む。少し學問あるもの、若くは少し地位ある者、下等の乘客の中に、鶴が掃溜に下りたるやうな顏付するは、まだ未熟の域也。どんな人でも、話しあへば、案外に學問以外の知識を得べし。

野田を過ぎ、新堀割の口にて、船、ちばらく、とどまる。江戸川は、關宿より利根の本流とわかれ、寶珠花、野田、流山、市川、行德を經て、海に入る。小利根とも稱す。銚子へゆくに、關宿まで行けば、非常な迂路なれど、こゝより野木崎までに、新堀割出來て、十七八里の水路が、僅々二里かそこらにて濟むやうになれり。流山を經て、松戸に上陸す。江戸川の

左岸に接して、奥州濱街道に當れる處也。一宿す。

雪の白根山

草津溫泉に一夜とまりて、明くれば、白根山に上り、萬座溫泉に出で、吾妻川に沿うて下らむと思ひしが、あひにく雨也。ならば、晴天に上りて、眺望を縱にせむとて、室にとぢこもり、いろ〳〵草津の案内記をとり寄せて讀む。『草津礦泉療法』といへるは坪谷水哉の序あり。著者は、下屋學氏、草津に住める醫師也。逢ひて、いろ〳〵草津の事問ひたくなりて、往いて之を訪へば、下屋氏も、其夫人も、我文を讀める未見の知己也。喜ぶこと甚しく、一見、舊知の如し。白根登山の事を語りけるに、同道せむといふ。思ひがけずも、面白き路伴を得たり。路伴は、なほ增して、都合十二人となりたり。下屋學氏、その夫人、補習科の教師佐伯正氏、小學校長の川村新次郎氏、寫眞師の富澤仙二郎氏、その小僧、中村屋の娘、小林亭の息子、半玉、知らぬ浴客二人、これ也。

七千尺の白根山上、一尺の雪を踏み、美人の酌に快く醉ひて、關東の山野を見下すと云へば、如何にも大袈裟に聞ゆれど、實は、草津より白根の絕頂まで三里と稱す。そのうち二里は、澁峠越の路にて、馬も通る也。あとの一里も、たゞ、だら〴〵上る路にて、一日がゝりとしては、至極氣樂なる遠足也。

草津より北を指して、白根山腹の高原を十町ばかりゆけば、下に一溪路を横切りて流るゝを見る。右手の絕壁に向ひて、オーイと云へば、オーイと答ふ。鸚鵡岩とて、有名也。紅裙隊は、小林亭の息子をつけて先きに立たせたるが、こゝに來れば、遙に前方に行くを見る。後隊にて岩にオーイと呼びかくる聲を、己れを呼ぶものとや思ひけむ、鸚鵡岩の外に、また

オーイと答ふ。思ふに、鳥や獸の鳴聲は、人間のオーイ也。鳥獸は、たゞ雌を呼ぶ爲めに、オーイといふ。人山中に入れば、同行ならぬ人を見ても、なほオーイと呼ぶ。愛情は、鳥獸も之を有す。博愛の趣を解するに至りて、はじめて、人間の人間たる所以は見ゆる也。

後を見れば、淺間山六里の裾野をひかへ、雄姿堂々として煙を噴く。その裾野の東端に鼻曲山を起す。恰も二段鼻の如し。榛名山は、掃部、榛名富士、相馬、水澤の諸峰簇立し、赤城山は、黑檜、地藏、荒、鍋割の諸峰簇立し、武尊山は高く孤立し、男體山は最も高く連山の彼方に頭を出す。前には、澁峠天半に横はる、元白根は左に見ゆれど、白根の本山は未だ見えず。元白根も澁峠も、雪を帶びて白し。『蟻の戸渡』にて、女隊に追ひ付く。左右は深谷也。安積艮齋の紀行には、こゝに至りて、戰慄して躊躇せしことを記したるが、聖代の難有さ、今は棧道さへ出來て、毫も危險らしくも無し。當年とても、馬が通りしとあるより推すも、例の神經過敏に失する、文人夸張の筆法なるべし。途上遙に一瀑布を見る。常布の瀧といふ。やゝ行きて、右折すれば、近くなりたるが、なほ、さしわたし五六町もあり。富澤氏曰く、『今見え居るは、三分の二だけ也。下の方より溪を溯らば、瀧壺にいたるべし。一日がかりの仕事なるが、白根山に上るよりも、ずッと困難なり』と。直下十二三丈ぐらゐかと思はるゝ可成りの瀑布也。一溪流また路を横切る。川村氏曰く、『これが有名なる毒水也。高野長英その毒水なるを知りて、碑を立てゝ、後人を戒めけるが、その碑は、明治十五年の噴火に埋れたり。五百金を懸けて、搜索せしめたれど、終にわからず。代りの石碑を立てたるが、馬鹿者がこの通りに破壞したり』と指すを見れば、碑の上半部のみ殘りて、路傍に倒れたり。馬鹿者の一言に力を入れたるに、一同覺えず笑ふ。澁峠近く前に見えて、路平らかに、一高原を成せる處、一軒の小屋あり。芳ケ平の茶屋と稱す。ひと先づ休息せむとて、中に入

れば、爐に火燃えて、旅の女一人當り居たり。我等を見て、何とも云はず、にや〳〵笑ふ。『何處から來た』と問へば、『澁溫泉から』と唯一言いふ。『草津へゆくか』と問へば、默つてうなづく。夏はこゝにて茶を賣る由なれど、冬は、住む人なし。燃料の堆きは、何人の情けにや。ちばし火に當りけるが、小蓋の池の浮島を見むとて、女隊は殘しおきて、富澤氏導を爲す。處々に小池多し。水、草原にちみわたりて、足いと冷たし。茶屋より凡そ二町にして達す。ほんの小さな池なり。浮島あり。草一面に生ひたり。ひろさ一坪までは無し。われらが立てる岸も、水上にうかべり。切り去らば、島となるべし。水は濁れりとにはあらねど、紺色を帶びて凄味あり。富澤氏と小林亭の息子と二人にて、浮島に乘り、丸太にて棹して、池の中心に出でたるが、水忽ち二人の臑を沒して、浮島の舟、あはや、沈落せむとす。岸にあるもの、手に冷汗を握る。されど、全體は沈まず。一方が沈めば、一方浮く。二人、浮きたる方へ移れば、沈みて、他の一方浮く。あちへ移り、こちへ移りつゝ棹して、漸く岸へつくことを得たり。一同ほッと胸なで下す。深さも知れたものにて、命に別條は無かるべけれど、この寒天に全身水に沒してはと氣をもみたる也。『夏は三人にて乘りても、こんな事は無きに』と、富澤氏小首を傾く。小林亭の息子、再び一人にて浮島に乘り、われらは岸に立ちて、撮影を待つ間も、足の先つめたくて、ふるへあがる。終るを遲しと、急ぎて茶屋にかへり、先づ足をあたゝむ。二本の正宗は爐の中へ置くに、自然に燗がつきたり。三つの大杯を飲める口の男六人の間にまはす。半玉酌してまはる。山賊の一群、里から婦女を掠め來て、酒宴を張るに似たりなど笑ひ興ず。

頂上へとて、少し戻りて右折す。燒石路に錯落して、頂上の一角、枯林の末に高し。路は急ならず。硫黃小屋を過ぎて、路少し急になりたるかと思へば、早や頂上の湯釜の岸に立て

る也。小さき火口湖、湛ふるは、水にあらずして、湯也。湯氣高く天に上る。一風かはりたる活火山也。火口壁を右につたひゆけば、左にまた一つの池を見る。瑠璃池と稱す。めぐりめぐりて湯釜の壁をも過ぐれば、また一つの池あり。水釜と稱す。湯釜を中央にして、三小池相竝ぶ。大さほど相同じく、まはりが三四町に過ぎず。三池を總括せる火口壁は、十四五町もあるべし。足を投ずれば、ぐさと少し地に入りて、毫も滑る心配は無し。東にやゝ離れて、弓池を見下す。四池、いづれも、火口の池となりたるもの也。火口小に、外壁の傾斜も緩にして、散歩がてらにまはりても、氣持よし。言はゞこれ箱庭的活火山也。この日、關東方面は霽れたれど、信越方面は、一面の雲也。頂上の最高峯の地藏ヶ岳も、雲につゝまれたり。その地藏ヶ岳の眺望をとて、雨に登山を延ばしたれど、人力の如何ともすべきにあらず。山に緣なきものと諦むるの外なき也。

夏ならば、暑さの爲めに苦しむべけれど、頂上に雪ある頃は、上り易し。下りは、猶さらく也。草津に歸れば、草津郵便局長の市川安一郎氏發起者となりて、有志の人々、わが爲めに、歡迎會を小林亭にひらく。冬ごもりにさびれたる草津の一谷、絃歌涌きて、夜を徹す。山下の村には、天狗、夜出でゝ、亂舞すとや聞えけむ。

紅葉の旅

一　華嚴瀧

過去の二十年間を顧るに、山水の遊を好むことは、かはらざれども、前の十年間は、險を冒し、脚力を伸ばすことを樂みとゐたりき。後の十年間は、囊錢が餘裕あるまゝに、山水の外に、一種惡遊の趣味を覺えたるは、われながら、凡夫のあさましき身也。自から以爲へら

く、上りては、高山の上に、平氣にて獨り露宿し、下りては、魔窟の底に、平氣にて眠れるやうになりて、はじめて人生を達觀するを得べしと。されど手をつけては耽る性分、事、心にまかせず。身を酒陣香園の中に沒して、山水に辜負すること久しかりしが、惡遊の趣味は盡きたり、惡緣も絕えたり。脚力體力到底青年時代の比に非ざれども、齡なほ四十に滿たず。たとふれば、今の我身は、人生の秋也。春花の榮は競へずとも、枯木寒巖にはあらず。起たむ哉と、脚を撫しつゝ見上ぐる秋の空高く、到る處の山々、霜を帶びて錦をかざれり。

日光回遊列車の賃錢半額なるを利用して、午前六時過ぎに、上野を發す。赤羽を過ぎ、荒川を渡りて、はじめて都を離れたる心地す。富士の白雪、朝日に輝き、武藏野の奧に卓立して、我を送るものゝ如し。『とりや、一杯』と、松本道別がもたらせる酒の瓶を取り出してさしつさゝれつ、車の動搖につれて、車にも分てり。向側に腰かけたる學生二三人、文藝講演會にて、道別と余とを見知れるが緣となりて、酒をも分ち、話しあふと云ふよりは、むしろ一種の講演を爲す。最も年若き學生、『先生が人相を見らるゝ由有名なるが、一つ見て下されー』といふに、『さらば見申さむ、君は同胞が多かるべし』と云へば、『然り、同胞九人あり』といふ。『運動が好きなるべし』と云へば、『然り、野球の第二選手なり』といふ。『君は食欲つよき相を有す。而して今や色欲の絕頂に達したる時期也。之を戒むる色にあり』と、村夫子めきたること言へば、『にきびが多いからか』と、道別、かたはらより、まぜかへす。一瓶の酒つきたる頃、相手の學生の同伴なる一人、他より席を轉じ來りて話しかくるに興まし、今一つの瓶をとり出して、一同に分ち、酒つきて興つきず、話もつきざるに、汽車は、いつの間にか、早や日光に著きたり。

日光に遊ぶこと、余はこれで四度目なるが、道別は、はじめて也。神橋燦然として碧流に

映ずるさま、いつ見ても、目さむる心地す。左岸は東照宮の杉の竝木、奥ぶかく、川上を見上ぐれば、幾箇の攢峯、彈丸をならべ立てたるが如く、鬱蒼として、天を刺し、黄葉其間にまじりて、山いよ〳〵鮮か也。『紅葉青山水急流』の句の妙なるを感ぜずんばあらず。輪王寺を經て、東照宮の前にいたる。道別は、好古の癖あり、美術の鑑識にもとめり。『是は思つたよりも見事なり』と感歎す。『見物は歸路にゆづらむ』と、立ち去りかねたる道別を促し、二荒山神社も、三代將軍の廟も、唯、そとより見たるのみにて立ち去りぬ。路に、一獵夫に逢ふ。銃を肩にし、背には、鮮血したゝらむばかりの鹿を負へり。

馬返を過ぎて、深澤に至るまでは、尋常一樣の溪谷也。見上ぐる屏風岩、はじめて山といふものに上りたる人には珍らしかるべけれど、さまで奇とすべきものにも非ず。殊に五年前卽ち明治三十五年の大洪水は、この深澤の溪流の美の一半を奪ひ去れり。その大洪水は、啻にこの深澤にたゝりたるのみならず、大日堂の園池を流し、含滿淵の石地藏をこはし、裏見瀑をして、其實なきやうにならしめたる也。山坂にとりつかむとする處に、女人堂空しく存して、海老茶袴かるぐ〳〵と上りゆく。劍ケ峯にいたれば、路しばし平か也。この劍ケ峰は、日光山中にて、最も紅葉の美觀をきはむる處なりと稱せらる。黄葉紅葉、谷を埋め、峰に及び、方等、般若の二瀑、その間に懸る。されど、瀑や小、溪流や微、谷や狹、峰や凡也。箱庭的小景也。中の茶店にいたれば、眼界やゝ、ひろく、左に華嚴方面の溪谷を見下し、遙に阿含瀑を望む。大平に至れば、其名の如く、路平か也。左折してゆくこと數十間、一軒の茶屋あり。五郎平茶屋といふ。星野五郎平といふ人、明治三十三年に、こゝより華嚴の瀑壺に下る路をひらき、こゝに茶屋を設けたる也。華嚴瀑は、もと見るに不便なる瀑なりき。曾通遊人は瀑壺の上の懸崖を下り、瀑の中央と相對する處にいたりて、のぞき込むだけにて、何

となく物足らぬ思ひたりき。稀に險を冒す人は、瀑の上の流をわたり、熊笹をおしわけゆきて、向側の稍〻傾斜ある懸崖を、石と共にすべり下りたりしが、こは少し危險也。今や五郎平氏のおかげにて、遊人やす〳〵と瀑壺に下るやうになれり。山水の恩人と云ふべき也。その上にも、白雲瀑とて、長さ三十丈、幅九間もある大瀑を新に發見せり。其七分目ぐらゐの處に、鵲橋をかけて、路を通ず。橋上に立ちて、瀑を見上げ見下す。湯本の湯瀑に似て、やゝ小也。かゝる處に、かゝる大瀑あらむとは思ひもかけず。思ふに、中禪寺湖の水、地下をくゞりて、こゝより迸り出づるなるべし。華嚴の瀑壺にいたれば、こゝにも茶屋あり。仰いで大瀑の直下するを見る。其雄偉なるさまは、拙き筆にはつくされず。唯日本第一流の大瀑とのみ云ひて止むべし。高さ七十五丈と稱すれども、理學士矢田部梅吉氏の實測によれば五十五間、卽ち三十三丈との事也。華嚴は、直下の點に於て、群を拔いて、雄偉也。されど華嚴のみが瀑に非ず。山は必ずしも高きを尙ばず、瀑は必ずしも長大なるを尙ばず。日光にても、華嚴の外、湯瀑、龍頭瀑、裏見瀑、霧降瀑、それ〴〵趣あり。なほ七瀑、眞暗瀑、相生瀑、日月瀑、慈觀瀑も、まんざら捨てたものにあらず。數年前、藤村操といふ第一高等學校の一學生、巖頭の感といふ文を草し、宇宙は不可解なりと叫びて、身をこの華嚴に投ぜしより、それにならひて、こゝに身を投ずるもの、百餘人の多きに及べるは、明治の世の裏面を語る一の現象也。玆に諸亡靈を弔ひて、短古一篇を作る。

宇宙不可解。不如殺我身。少年秀才一作俑。續而死者忽百人。
舉世無氣骨。唯爲一身憂。大瀑滔滔懸萬古。巖頭半夜鬼愀愀。

さきに、余は淸瀧村の途上、道別のナイフを借りて、自製の金剛杖をつくれり。華嚴よりの歸路、五郎平茶屋近くなりけるに、「あなた、それ頂戴な」と、意氣な快闊な聲に、思はずも

その杖を所望せられて、いやとも云へず、『あゝ、あげよう』と渡す手は赤黒く、受くる手は白く、上る肩と下る肩と、すれあふばかりにて、白粉の香、髪油の香、一種の女の香、鼻をかすめて去る。この女は、女人堂のあたりにて、余等が、石に腰かけて休み居たりし時、過ぎゆきたる四人づれの一人也。垢ぬけしたる顔付にて、髪は銀杏がへしに結びたり。年は二十五六に見ゆ。年二十二三に見えて、丸髷に結びたるは、その妹とおぼしく、顔何處か相似たれど、姉はやゝ細面にて、妹は丸ボチャ也。四十五六に見ゆる女は、この二人の母にや。四十歳前後の男は、この姉の方の夫らしく、髭さへありて、商人ともつかず、役人ともつかず。骨格は、逞ましけれど、いたく憔悴せるは、病後なるべし。今再びこの一群の、下り來るに逢ふ。老母先頭にあり。五六間へだゝりて、姉妹相連る。妹、先にあり。杖を乞ひたる姉、後にあり。それより二十間もへだゝりて、男よぼ〳〵と、這ふやうに下り來る。活氣は腹にある顔付なれど、病には敵する能はざるべしと、氣の毒になり、杖は、この男に與ふべかりしをと、ふりかへれば、早や美人の影も見えず。ゐざりの夫を車にのせて箱根山に上りし女もあるに、このやうによわれる夫をたすけもせで、あらぬ男に臆面もなく、わが爲めの杖をねだるは、いづれ藝者か茶屋女か、もしくは、それらの身の果なるべく、平生、鼻下長の紳士に著物をねだり、金時計をねだり、芝居をねだり、遠出をねだりつけたる癖の上の乞食、自製の杖などは、何とも思はざるべく、それを病夫に與へむとも思はざるまでに、世人一般に輕薄になり、ずうゞしくならば、華嚴に身を殺すものも絶えはてゝ、天下は太平なるべし。

高山植物の林つきて、中禪寺湖を見る。霰を帶びたる疾風、枯葉を捲いて、山岳もうごかむとす。日もくれかゝりたり。中宮祠下の一旅店に投宿す。風なほ止まず。家うごきて舟に

あるが如く、岸うつ浪の音、山上の湖とは思はれざれど、醉うて耳熱したるからだを、衾中に横ふれば、いつしか、すや〳〵眠りぬ。

二　阿瀬峠

旅は、ゆき當り、ばッたり、錢ありて行き、錢つきて歸るまで也。この旅、日光の紅葉と大體の見當は付けたれど、日光第一ときゝたる劍ケ峯の紅葉は感服せず、何處か面白き處へと、思案するともなく、庚申山を思ひ出したり。十八年前に遊びたることあり。されど、われ未だ之れを世に紹介せず。世上の紀行家も、足跡こゝに及ぶもの、幾んど無きやう也。惜むべし、庚申の奇、未だひろく世に知られざる也。唯旅費の點は如何はしけれど、まゝよ、往いて、再び庚申の奇を探らむと決心す。

朝早く鶯鳥の聲に目ざめたり。風收まりて、波平らか也。昨夜、舟をたのみけるに、『風なくば』とうけあひけるが、うれしや、今日は湖上を舟にて渡ることを得る也。起きて南方の戸をあけむとするに、生憎、戸袋は他客の占めたる鄰室にあり。西方の戸のみは、あくるを得たり。夜はあけたれど、日光は、未だ湖上に及ばず。空はよく霽れて、唯男體山の方より湖を過ぎて、彼方に飛びゆく雲のかたまり、いくつとなく相續く。その雲、朝日を帶びてあかく、水にうつりて、水も亦あかし。あゝ、色彩の美は、雲にあり。雲の朝日夕日にうつるにあり。春の花や、言ふに足らず。秋の山の黃葉紅葉とても、到底、雲の美には比ぶべくもあらざる也。

八時半頃、舟に上る。同宿の客三人、同じく乘る。これらの人は、上野島、歌ケ濱あたりを遊覽せむとする也。湖心に近づくに從ひて、男體山ます〳〵大に、ます〳〵高く、北に當りて、湖を壓して磅礴す。處々薙あるが疵なれど、頂までも綠樹を帶びて、其形兜の如く、

堂々として雄偉也。東南の山々は、黄葉を帶びたり。峰形奇ならねど、凡にもあらず。高低の配合も巧に出來たり。西の方には、湯ヶ嶽前白根の諸高峰、遙に連亙す。その中に、奥白根、連峰の上に鎗のごとく矗立して、白雪をいただけり。上野島は南峰に近く、孤松を負ひたる岩塊也。舟其傍を過ぎて、阿瀬瀉に著す。二軒の茅屋ありて、茶菓を賣る。なほ記す、曾遊の時、湖上に舟を泛べむと思ふこと切なりしも、旅費乏しきが爲めに、止むを得ず、東南岸をめぐりて、こゝに來りしが、今や十八年目にして、其思を果したる也。

三人の客に向つて、『わづか五六町の程なり。こゝの峠まで上られよ。前は中禪寺湖をへだてゝ男體山を望み、後は、足尾の銅山を始め、渡良瀬川流域の群山を見下して、眺望の佳なること、日光第一なり』と勸めけるに、諾して共に上る。年最も長ぜる紳士、肥滿せるために、この僅々數町の山路にも、いたく苦める樣なりしが、峠に達するに及び、汗を拭ひつゝ前後を顧み、『君の言、眞に然り。骨折りしかひあり』と云ふに、われも何となく、うれし。殊に富士山の見えしは、余とても、意外に感ぜし所也。中宮祠畔より男體山を仰げば、さまで高大ならず。湖心に出づるに及びて、やゝ高大也。こゝに至りて、益〻高大也。この峠なほ一層高からば、男體山もなほ一層大なるべし。己れ高くして他の高きを知り、己れ大にして他の大なるを知る也。英雄、英雄を知るとは、信なる哉。

こゝの峠を、土人呼んで、『あせのたわ』と稱す。たわとは、山の撓み凹みたるの謂也。男體山は、日光山彙中の王なるが、日光あたりより見ては、さまで美ならず。こゝに上りて、はじめてその美を見る。加ふるに、湖水あり、渡良瀬川流域の群山あり、富士山あり。日光を見ずんば、結構を說く莫れと云ひけるが、余はこれに一轉語を加へむとす。曰く、『阿瀬峠に上らずんば、日光山の美を說く莫れ』と。

阿瀬峠より中宮祠まで、凡そ一里、足尾の本宿まで二里、前者への下り坂は僅々五六町、足尾への下り坂は、之に七八倍す。三人の客と別れて、やゝ下れば、溪流あり。これ久藏川にして、渡良瀬の上流也。足尾より中禪寺湖に出づる唯一の道路とて、冬期を除きては、往來少からず。處々茶店あり。その三番目の茶店までは、普通の山路なるが、それより下、赤倉までは、天下の危道也、險道也。否、危險の度を通り越して、惡魔的道路也。それも曾遊の時には無りしが、近年洪水多きが爲めに斯くなりたりとぞ。洪水多きは、山に草木なきが爲め也。草木なきは、銅山の烟毒の然らしむる所也。銅は、我國の輸出品中の尤なるものゝ一也。而して、この足尾銅山は、日本中の銅の產額の四分の一を占む。物質的に國益を爲せること、大也。俗に、『毒にもならねば藥にもならぬ人』といふ語あり。足尾銅山は藥にもなる代りに、毒にもなる。卽ち下流には、鑛毒を流して、魚類を絕ち、田を枯らし、農民を流離散亡せしめ、赤倉川流域には、烟毒を放ちて、草木を絕ち、必要上、山林を濫伐し、洪水を起し、山をくづし、道路をも破壞して、斯くの如く、惡魔的となしたり。見渡す限り一草なく、一木なく、山は赭黑色を帶びて物凄く、此世ながらの地獄に陷りたる心地す。現に去年提燈屋の小僧とかゞ、この惡魔的道路を過ぎて非命に死せし由也。この路、中宮祠に通じて、往來の必要あるとは、足尾よりの上り路に、三箇の茶店ありて、旅人の爲めにのみ烟を立つるを見ても、之を知るべし。かゝる往來の必要ある處に、かゝる惡魔的道路を存しおくものゝ心も、惡魔的と言はざるを得ず。余は、單に惡魔的道路と云ひたるが、なほ精しく說明せむに、下は千仞の絕壁、上は危巖落ちむとし、而も路幅は一尺とは無き位なら、普通の危道なるが、こゝの道はそれどころに非ず。下も絕壁千仞、上も絕壁千仞、絲の如き細逕その間を縫ひて、すれ違ふとは出來ず。而も沙がぼろ〳〵落ち積みて、手を託するとも出來ず、

足を託するとも出來ず。ほろ〳〵したる岩石、上に堆くして落ち易く、雨風の時は、必ずごろ〳〵落ちさう也。かゝる路凡そ三十町に及ぶ。現に昨暮、一群の學生こゝを過ぎけるが、風つよくして吹き飛ばされさうになり、上よりは石落ち來りて、大に難儀せりとの事也。

赤倉に來りて午食す。こゝは銅山の爲めに新に開けたる山間、否、地獄谷の一都會也。鐵橋一つ渡れば、銅山の本山に入る。この銅山は、慶長年間に開かれて、幕府の有なりしが、明治の世になりて、政府の有となり、民有となり、廢したりしが、明治十年古河氏の有となりてより、次第にさかんになり、今や東洋第一の銅山と稱せらる。東は赤倉川、西は庚申川、南は渡良瀬川の間に聳えて、さまで高からざる山也。坑口は四つ、本山と有ノ木とは赤倉川に臨み、通洞坑は渡良瀬川に臨みて、足尾の本宿に接し、小瀧坑は庚申川に臨めり。四坑相連絡し、長さ數里に及ぶ。製煉所は、今は本山のみにあり。赤倉川流域が、地獄谷となりたるも、この製煉所の烟毒の致す所也。小瀧にも設けられて、庚申川流域を半ば地獄化せしが、鑛毒問題やかましくなりてより、移されて本山に合せり。なほ沈澱池を設けて鑛毒を消し、烟を水に通して烟毒をも消すやうになりて、銅山にても害を減ずる方法を講ぜり。さるにても、農民の爲めに、十年一日の如く、朝に、野に、鑛毒を呼號せる田中正造氏は、明治の世の木内宗吾と云ふべき哉。

三　庚申山

十八年ぶりにて、余は再び庚申山を見むとする也。赤倉より本山を越えて、銀山平に出づ。こゝは庚申川にのぞめり。この路凡そ一里、半里上りて半里下る。上る路の半までは、製煉所あり、選鑛所あり、採鑛所あり、諸種の事務所あり、工夫の住める飯場あり。それより下りて、下りはつるまでには、ほつ〳〵農家ありて、畑あり。うゑたるは、大根がおもにて、

三河島もまじれり。脊中に桶を負うてゆくを、何かと問へば、糞桶なりといふ。天秤棒でかつぎゆくことは出來難き山路なればなるべし。銀山平も、銅山の一部分也。本山と小瀧と根利山との三方に向つて、鐵索通ず。鐵索は電氣力を以て、物を運搬する一種の仕掛也。その鐵索、人跡なき山より山にかゝり、谷また谷を越ゆ。根利山よりは、絶えず、材木、薪炭を運び來る。板とすべきは、茲にて、機械にて、一瞬數枚を引き割る。根利山の方を仰げば、峯さけて、貨物、鐵索につれて、天より下り來りて、尚空を飛ぶ。天帝物を人間に賜ふかと疑はる。文明は、多く自然を俗了すれども、鐵索には詩趣あり。數里の山奥より巨材を送り出すの便、殊に大也。人間の力も、亦偉大なる哉。

庚申山の奇は、銀山平より始まる。小瀧の烟毒も、こゝより奥には及ばず。左右の兩山、骨を露はし、溪流を夾んで、つゝ立つ。否、相鬬はむとす。路は左岸の崖腹に通じて、次第

次第に上る。こゝも下は絶壁千仞、上も絶壁千仞なれども、路幅はひろく、ふみしむる巖石はかたくして、赤倉谷の如き惡魔的道路にはあらず。處々棧道あり。棧道も出來ぬ處は土橋となりて、空にかゝる。右峯の缺くる處は、更にその奥に幾多の岩峯のかさなりあへるを見る。進むに從ひて、黄葉多し。ます〳〵進めば、黄葉よりも紅葉多し。岩に紅葉を帶びたる峯もあれば、頂までも黄葉紅葉を以て充たされて、恰も一大花束の如きもあり。一峯おくれば、一峯迎へ、前を望むも奇にして麗、後を顧るも、怪にして艶。岩峯の奇、甲州の昇仙峽に似て、更に峻峭也、且つ幽邃也。紅葉の美觀は劍ヶ峯の比に非ず。渴して溪流を掬すれば、清冽玉の如く、紅葉漂ひ來て口に入る。

根利山との岐路に、木の鳥居あり。こゝより庚申山腹の社務所まで、凡そ半里、路稍〻急なり。庚申山、頭を壓して峙つ。左右の諸山はみな紅葉を帶びたるに、この山のみは、絶頂

までも緑樹を帶びて、脂粉の氣なし。前面は、山骨をあらはし、而かも妙義の如く小刀細工的ならず、奇峭にして雄拔、唯見上げたるのみにても、他に其類なく、神仙の山とも云ふべき、一種の靈山也。

薄暮、社務所に投宿す。足尾の本宿より、三里と稱す。深山の奥の一軒家也。庚申山神社も、社務所も、客室も、すべて一つ棟也。山高く深くして、夏も單衣を著ることなしといふ處、十月の末の氣候は、下界の嚴寒の候に同じきに、二尺四方もある大火鉢に、まッかなる炭を山盛りにせるは何よりの馳走と、片手は火にあぶり、片手に杯を執る。夜のつとめにやあらむ、神鼓鼕々として祝詞の聲起る。豪遊一瞥、脂粉の香にあきては、山氣の身に志むもうれしく、神鼓の音樂、祝詞の歌、勿體なけれど、神前の對酌、殊に興あるを覺ゆる也。

明くれば、小童、導を成して山頂に上る。同じく宿せし長髪の行者も共にす。右に見上ぐるばかりの巨巖、幕を張りたるが如く、長く横はる。童曰く、百間幕也。臣巖城樓の如く立つ。曰く、やぐら岩也。仰げば、舟の底をあらはせるが如し。曰く、御舟石也。數條の水、滴りて瀧を成す。曰く裏見の瀑也。頭を壓するの大巖、女人の裳をまくりたるが如し。曰く女體石也。菌に似たるもの、曰く、菌石也。烏帽子に似たるもの、曰く、烏帽子岩也。人の踞して嘯くに似たる者、曰く、仙人岩也。左に離れて、屹立する巨巖、曰く梵天岩也。巨巖兩方よりせまり來り、上にも巖はさまりて自から門を成す。曰く第一の石門也。巖に穴あきて、くゞりぬく。曰く、小胎内也。また穴ありて、くゞりぬく。曰く、大胎内也。懸崖の口を開ける處を過ぎ、遙に富士を望む。曰く、富士見岩也。巖腹に、人の坐れるが如し。曰く、釣り大黒也。人蹤及ぶべくもあらぬ巖面に梵字を刻めるが如し。曰く、文字石也。燈籠石、螺螺石、燭臺石、獅子石、みな形によりて、名あり。路右に轉じて、男體山を望む。そ

の路窮まりて、巖窟あり、小祠を安んず。これを仙丈が岩戸と稱す。歩をかへして頂上さして上る。樹は幾んどみなツガモミ也。女蘿之にかゝる。踏む地は、土なく、數千年來の落葉重なりて、彈機ある椅子の上を歩くが如し。絶頂の一角に、木劍を安置す。劍ケ峯と稱す。兩毛の群山、脚下に在り。富士も見え、筑波も見ゆ。關東の平原、千里の外にひらけたり。げに天下を小とするのながめ也。小憩して下り、大胎内まで戻り來りて、横に山腹を縫ひゆく。山腹と云ふものゝ、一山みな巖、漸く鐵鎖にすがりて過ぐる處を、親不知と稱す。扇石あり、象石あり。巨巖路に横はりて、穴二つあり。曰く、第二の石門也。『さは』を成し、石ごろ〳〵して、傾斜急なり。曰く、天狗の投石也。兩巖せまる處を鐵鎖に縋り、一本梯子を踏んで上る。曰く、鬼の剃髭也。巨巖の上に出づ。小祠あり。眺望のよきこと、絶頂よりもまされり。こゝを見晴しと稱す。幾度か鐵梯木梯を上下し、鐵鎖にすがり、終に『さは』を上る。釜に似たるもの、釜石也。龜に似たる者、龜石也。鶴に似たる者、鶴石也。釣鐘に似たるもの、釣鐘石也。『さは』盡き、鐵梯を踏んで巖腹に上れば、三窟あり。何れも小祠を安んず。中央は猿田彦命、右は大己貴命、左は少彦名命を祀る。奥の院とはこれ也。巖より水滴りて氷柱となり、連りて水晶簾の如し。取つて口にすれば、神氣頓に爽快なるを覺ゆ。梯を下りて東に出づれば、また男體山を望む。前に筑波山を望みつゝ、巖はなくして、熊笹の志げれる處を下る。こゝにいたりて、危險の念は無くなりて、心のびやか也。庚申山を見上げ、見下しつゝ、社務所に戻りて、登山は、こゝに終りぬ。『奥院より仙丈が岩戸へゆく路にも、いろ〳〵の奇巖あれど、今は行かれず』といふ。なほ二三里ゆけば、大嶽山あり。庚申山の繁昌せし頃、そこを奥院と志たる由なるが、今は、ゆくもの幾んど無しとの事也。社務所には、案内する者なし。こは、他日別に導者をやとひて、さぐらむと思ひぬ。

庚申山は、海拔六千餘尺、八千尺内外もある日光山彙の間に介しては、高を競ふ能はず。されど、足尾の本宿より山腹の社務所まで、凡そ三里の溪谷、幽にして奇、半腹以上は、一山みな巖、而かも頂上までも綠樹ありて、かうぐしく、深山幽谷の趣を有すること、日光の諸山に冠たり。强ひて形似を求めて、巖に名を附せるは、兒戲的也。唯一寸見れば、とても人蹤を著けさうにもなき山腹を、鎖にすがり、梯にたよりて上り下りして、見上げ、見下し、つくぐ造化の技巧に驚かざるを得ず。げに、天下の奇山也、怪山也。而かも、さまで小刀細工的ならずして、秀靈の氣に富み、雄偉の相を有す。靈山也、もしくは仙山也。

午食して歸路に就き、銀山平、小瀧を經て、足尾の本宿に來りし頃、日既に落ちたり。明日は、亡兄の一周忌也。兄の家に赴かざるべからず。今日のうちに、日光へと思へど、七里の山路を夜越えむ勇氣なし。勇氣はあれど、今の脚力、之を許さず。十八年前の事を思ひ起し、悵然として、足尾にやどり、あくる日、早發し、夕方、東京に歸りて、漸く祭典に間にあふことを得たり。

余は、足尾日光間の紅葉の美を特筆せざるを得ず。足尾と日光との中間に、細尾峠あり。足尾よりすれば上りが一里、下りが二里、その上り路も、下り路も、左右に溪谷ありて、左右の峯々の眺めおもしろきこと、類まれなる嶺也。而かも上るより下るまで、滿目すべて紅葉也。いそぐ旅なれど、あまりのうれしさに、峠の茶屋に小酌す。前に落葉松の林あり。柱にかけられたる籠の小鳥、われを見ては、餌をついばむ。日光の方より來れる一人の老婆、笠は脊にし、頭に手拭かぶり、杖つきて、とぼ〳〵と歩きけるが、左手には、燃ゆるばかりの紅葉一枝を携へたり。やがて、僧二人、墨染の衣、白の脚袴、老いたるは頭巾をかぶり、若きは、そりたての頭青きが、いづれも紅葉を手にせり。下りかけて見れば、僧や老婆の手

折る氣になりしも、うべや。紅葉、路の兩側に滿ち、人は錦繡の中をゆく。われらも、たまらなくなりて、二枝折りて、各、肩にす。見あぐる左右の山々、凡て一大花束也。下は大谷川の流域を見下し、遙に高原山の崛起せるを望む。もし紅葉のみを以てすれば、庚申よりもまされり。中禪寺道中の如きは言ふに足らざるなり。

余は、歸らざるべからざれども、道別は用事なし。『一汽車おくらして東照宮を見よ』と勸むれども、辭す。あべこべに、余に『車にのれ』といふ。辭しては見たるが、祭の方が大事なりと、忍んで細尾より人車に乘る。さるに再び停車場にて落ちあへり。旅は路づれ、歸る汽車の中も寂しからず。右方を顧みて、庚申山を見むとすれど、それかと思はるゝ山もなし。庚申山は所謂深山なり。半腹にいたるまでは、何處よりも見えず。見ゆるにしても、目だゝず。高原山や、赤城山や、榛名山や、庚申山よりも低し。筑波の如きは、その半にも足らず。されど、みな遠くより見らるゝは、山淺くして、人寰に近ければ也。庚申や、日光山彙の中にありて、高さは男體に壓せらるゝも、靈山たることは、遙にまされり。山豈に高きにあらむや。人界に見ゆるにあらむや。『一度見ぬ馬鹿、二度見る馬鹿』といふ庚申山に對する俗諺あり。庚申の如き靈奇の山を一度も見ざるものは、馬鹿也。されど危險きはまる山なれば、二度とゆくは馬鹿なりとの意也。われはその二度見る馬鹿となりけるが、閒と錢とあらば、なほ三度見ることを辭せざる也。

常磐の山水

一　利根川

千住の名物、鮒の雀燒をさかなに、車中に微醉を買ふ。帝釋まうでは金町より人車鐵道に、

成田まうでは我孫子より汽車に乘り換へしが、我がゆくさきは奥州仙臺、小利根を過ぎ、又大利根を過ぐ。このあたりは、さまでの大小なし。風致もほど相似たり。されど余はむしろ小利根河畔の松戸よりも、大利根河畔の取手を取る。水に枕むの紅樓、醉を買ふに足るべし。古城址の丘、遙に富士を望む。極目蕭散にして快闊也。

二　筑波山

東京を出でゝより石岡あたりまでは、幾んど絶えず左に筑波山を見る。土浦より凡そ五里、山麓まで車を通ず。山腹、筑波祠前に筑波町の市街あり。なにがし宿屋の二喬、何人か銅雀臺にとざしたりけむ。左右二峯、女峯に奇岩多し。いつもながら辨慶のひきあひに出さるゝこそ氣の毒なれ。戀ぞつもりて淵となりぬるみなの川は、男峯より出づ。唐人が人間に向ふの嘆息を口眞似したる舊作に曰く、

雲上の高根をよそにみなの川
落ちて下りて淵となるらむ

三　霞が浦

土浦もしくは高濱より汽船にのりて霞が浦を横斷するを得べし。浮島に風光を賞し、潮來出島にあやめを看、鹿島、香取、息栖の三祠に詣で、大利根の下流に浮んで銚子に下る船中、富士迎へ、筑波送る。いかに心ゆく舟路ぞや。

四　水戸

義公を祀れる常磐祠は第一公園に、弘道館は第二公園に在り。二園共に梅多し。殊に第一園は、岡山の後樂園、金澤の兼六公園と共に、日本三公園と稱せらる。一帶の丘上、當年の好文亭なほ在り。梅樹數千章、雪裡今に春を占む。千波湖の一半は田となりたれど、丘下に

一大明鏡を開く。此地前に義公あり、後に烈公、東湖ありて、大義を明にしたるも、豪傑の士黨爭に斃れて、折角の維新前後には、蕭條として人物なく、たゞ風光徒に舊に依りて美也。

五　大洗

水戸に遊びたるついでに、請ふ君、水戸上市の北端、杉山より川蒸氣に乘りて、水路三里那珂川を下りて、大洗に遊べ。大洗祠前、海水浴旅館波に俯す。子の日原の喬松、その幾千株なるを知らず。磯節に、『松が見えます』とあるものは卽ち是也。欄によりて明月に酌めば、夜涼座に逆り、漁歌遙に相答ふ。場所柄の磯節きかむとて、校書を聘すれば、都の落武者なるに、いとくちをし。

六　西山

請ふ君、なほ急がずば、水戸より太田鐵道にのりかへて、太田に著し、そこより人力車にのり、桃源橋を過ぎて、西山の舊草廬を訪へ。四方の小丘、數百年來の老樹しげり、古き池には、蓮生ひたり。これ義公が老を養ひし處、義公の居間と侍臣の謁見する室との間に闕を設けざるは、義公の心の存する所を見るべし。その庵、天保年間に燒けたれども、規模用材等悉く舊によりて再築せりとかや。さすがは烈公也。

七　勿來關

關本にて汽車を下り、平潟の市街を過ぎて、八幡山より平潟灣を見下せば、眺望亦佳なる哉。この地、十數の妓樓あれど、波に漂へる舟夫の輩が、舟よりはましなりと思ふにすぎざるべし。幾箇の洞門をすぎ盡して、磐城に出づ。海澄より七八町上りたる處、傳ふ、これ勿來關址なりと。馬上弓を横へて歌を吟ぜし八幡太郎、今何の處にかある。路も狹にちりけむ山櫻もすでに枯れつくしぬ。星霜こゝに八百年、將軍の昔を問へば、松籟むなしく謖々たり。

八　湯本溫泉

濱街道唯一の溫泉場、兼ねて唯一の溫柔鄕たる湯本溫泉は、小山の間にある別天地也。汽車此地を過ぎ、石炭坑數箇處此附近に發見せられ、その機械場、常に煤煙を吐くに至りて、風致頓に俗了せり。されど、市街の中に崛起せる觀音山にのぼれば、矚目頗る閒雅也。數十の溫泉宿、悉く脚下にあり。東山逶迤として、恰も畫けるが如し。

『送りましよかよ、天王崎へ。それで足らずば、船尾まで』とは、都にゆく客を送るなるべし。妓樓市街の中にありて、宿屋より遙に立派なるもの多かりしが、福島縣下は妓樓の市街中にあるを禁じたるを以て、四軒まで減じ居りし妓樓は、たゞ一軒となりて、市街の外に移りぬ。妓樓は變じて宿屋となりぬ。而して藝妓の數、娼妓に幾倍するに至れりとかや。

美人欄によりて一高樓を指して曰く、もとこれ妓館也、今もなほ記す、去年の春の暮、その妓館の一遊女、美にして利口なりしも、男に惚れてはのろき女性のならはし、男の心かはれるを見て、誓詞かゝせむとて、紙とりに行きたるひまに男にげゆきぬ、あと追へど及ばず、女終に熱湯のわき出づる槽中に入りて爛死せるこそいたはしけれ、その湯槽は是なりと指す。槽は蓋ありて、熱湯は見えず。盛に立ちのぼる湯氣は、むかし李夫人のあらはれし返魂香もかくやと見ゆる夕の空、湯氣の末に一痕の缺月かすか也。

九　湯の嶽

湯本溫泉、一に三函の湯と稱す。湯の嶽の頂に、三箇の石あり。函に似たり。溫泉の根原なれば、これを取りて、かくは名づけたるなりとは、受取りがたき說なれど、久しく書窩の下に鎖したる健脚を伸ばさむとて、導者一人やとひて立ちいづ。

湯の嶽の麓にいたれば、小野田炭坑あり。馬小屋の如き人家のたちならべるは、坑夫の住

居なるべし。山中に一區をつくりて物うる家二三軒あり。飲料には一溪の水を分ち、上流に汚れたる衣を洗ふものあれば、下流には米とぐものあり。三四疊ばかりの小屋の中に、妻もこもれり。二三人子供もこもれり。住めばこゝも都なるべし。君と共に住めば、手鍋さげてもと青春の戀にうかるゝ都の若き男女に、かゝるさま見せてやりたし。

導者は、六十ばかりの老人也。自から稱す。汽車の通ぜざりし頃は、車夫を業とし、東京まで二日半にて走りつき、得たる賃錢を紅樓に一擲して豪遊せしも、すでに一炊の夢に歸しぬ。君よ、我に湯本の花柳界の事を問ひ給ふこと莫れ。老來絕えて芳ばしき夢を結ばず。湯本の驛外、半頃の地を求めて、暮耕朝耨、かくて我生涯は終はらむとする也。

二日半にて六十里の路を走りし男も、老いては、さまで健ならず。われは蕨をとりつゝゆくに、導者はなほおくれがち也。頂上に至れば、一木なし。一面は海、三面は山、常磐の山海、指顧の中に在り。導者は一々山岳の名を指さし教へむとすれど、暫く休息せよ、さまで記するに足るべき名山もなしとて、岩にこしかけて、煙草をふかしつゝ眺望すること多時。

歸路、頂上より七八町下りたる所、一羽の雉、地にすわりて、人を見れども動かず。げにや燒野のきゞす、夜の鶴、子をかへすにやあらむと、横目に見て、すぎ去らむとすれば、導者もまた早く之を認め、むざんや、棒を以て之をなぐる。雉驚いて空に上ること三四尺。力なく地に落ちてまた飛ぶこと能はず。眼なほ瞑せずして口に鮮血を吐く。そのすわりし跡を見れば、果して數箇の卵ありき。ひどきことをするもの哉、親鳥はせむかたなし、せめて卵は鷄にでもかへさせむとて、導者にもたせて、山を下れり。谷底遙に雄雉の聲を聞く。雌を呼ぶにやとあはれ也。

十　松川浦

相馬の野をすぐるに、また當年の野馬を見ず。相馬氏の故城址は、中村驛外にあり。城門城濠、石壁なほ存す。今宵は原釜の海水浴旅館にやどらむとて、中村停車場より車にのり、細田入江に至りて、車をすて、舟に上る。

余はこれより松川浦に浮ばむとする也。松川浦は松島に次ぐ東奥の奇勝と稱せらるゝ處、余は多年之を夢寐に見しが、今現にその地に來れり。うれしさ譬ふるに物なし。

されど、夕陽は用捨なく西に沈めり。暮色はや灣々を罩めつくせり。われ舟夫に向ひて、舟を原釜の方にすゝめよと云へば、日暮れたりとも、せめて松川村まで至りて、然る後に原釜に赴き給へといふ。いなとよ、名だゝる勝地、やみの中に見て過ぎむは、殘り多し。明朝を期して、重ねて來り見むと云へば、さらばとて、舟夫舟を蘆荻の間につなぎ、余を導いて一旅館に至り、明朝を約して歸り去れり。

時節はづれのことゝて、女中はひとりも居らず。宿の妻は、中村の本店にありとて、主人自から食物を調理し、自から膳をはこび來りて、杯酌に侍す。木訥仁にちかき男也。なまじひの女中などより却つて興ある心地して、快く酒のみて寢につけり。

翌朝、あさめしを終れば、昨日の舟夫、既に來り居たり。荷物は宿屋に置きて、酒肴をもたせて、汀邊に赴けば、舟は昨夕つなぎしまゝに横はれり。舟夫は陸路家にかへり、また陸路より來れる也。

いと晴れわたりたる日也。舟は文字島さしてゆく。水淺くして、扁舟膠して動かざることあば〳〵也。舟夫遙に右の方の老松數株生ひたる孤丘を指して曰く、これ十二景の一なる川添の森也。舟夫又一帶の長丘の中に蘭若の見ゆる處を指して曰く、これ紅葉の岡也。紅葉の岡の盡きたる處、水中に草木なき孤岩立つ。舟夫曰く、これ文字島也。文字島と竝びて、稍

大に、岩あり、樹木あるもの、曰く沖が島也。舟、兩島の間の橋下をくぐりてゆけば、右の方遙に一帶の松洲を見る。曰く、松沼の濱也。その南に、梅川、鶴巣野の勝地あれど、遠くして見えず。舟左に轉じて、中洲に至る。洲上を散歩す。砂清く、松小にして奇也。對岸一帶の長洲長さ一里半、喬松生えつゞけり。曰く、長洲の磯也。また舟に上り、左の方松川村さしてゆく。この間、水中に四つ手小屋多し。漁期にあらぬにや、小屋には人なくして、四つ手網むなしく空に懸れり。亦松川浦上の好風致也。漸くにして漁家のならべる岸に達す。曰く、これ松川浦也。曲折してひろがれる松川灣、こゝより幅數間、長さ四五十間ばかりの川形をなして、海に接す。曰く、飛鳥の湊也。湊と云へど、わづかに小なる漁舟を通ずるばかりの處也。この灣口の北を扼せる一帶の岡を水莖山といひ、水莖山の最端を鵜の尾岬といふ。舟を下りて、陸に上れば、夕顔觀音あり。觀音堂後をめぐりて、鵜の尾岬にいたる松川浦の全景、悉く眼前に在り。長汀曲浦の觀、つぶさに其美をつくせり。屏風の如く立ちかこめる磐城の山々、或は遠く、或は近く、秀色を送りて、一層の趣を添ふ。島の奇なることは松島にくらぶべくもあらねど、屏風の如き山々と、長汀曲浦の觀とは、或は勝るとも、劣らざるを覺ゆ。

舟を回し、松川の漁村を右に見て、原釜の方に向へば、陸よりすこし離れて、文字島ばかりの大さの島あり。曰く離崎也。離崎、鵜の尾岬、水莖山、松川浦、長洲の磯、鶴巣野、梅川、松沼の濱、沖が島、文字島、紅葉の岡、川添の森、これ松川浦の十二景とする所なれども、さばかりの景致あるにあらず。

水淺き浦とて、貝を拾ふもの多し。玩具のくゝり猿の如き樣して、水に俯する母の背に負はれたる赤兒、泣いてやまざるも、母は之を懷くひまなし。乳ほしきものをと、あはれ也。

浦を一周して、もと舟出せし處に來る。松川浦の遊覽こゝに終れり。余はこれより中村にかへらむとて、舟夫を宿にやりて、荷物をとり來らしむ。待つ間の退屈まぎれに舟を棹さゝむとするに、まがり〳〵てすゝまず。げに櫓三日、棹三年と云ひけむ、舟夫になるも、容易なる事にあらずと、ひとり笑ひき。

金華山

上野公園の新綠に送られて、來て鹽釜神社に詣づれば、祠側の鹽釜櫻、笑つて我を迎ふ。一株の老櫻、倒れむとして、また起つ。八重の瓣内に葉を出すこと、他に比類なく、海内たゞ一本の珍木ともてはやさるゝもの也。祠は鹽釜町はづれの丘上にあり。古檜老杉鬱として百餘級の石磴を夾む。祠宇宏壯、自からこれ東北第一のやしろ也。安產の守札世に名高し。

親戚の女に孕めるものあり。その母われに囑して、鹽釜に行かば、安產の守札うけて來てくれよと云ひけるまゝに、五枚ばかり買ひぬ。一枚の紙片、よく幾千萬の產婦をして、安心せしめたりけむ。世に醫藥のみが病をなほすと思ふものあらば、とんでもなき間違也。病を起すも氣也、病をなほすも亦氣也。加持祈禱、守り札、百度參りなど、その效幾んど醫藥に下らず。かの迷信を排斥するだけの知識ありて、死生の間に超脫するだけの悟道なき一知半解の徒、一朝重き病に罹れば、自からもだえて死するこそあはれなれ。

鹽釜町のまんなかに、釜神社あり。鹽土老翁を祀る。祠側に四個の古釜を置く。かこひあり て見るべからず。社務所に一錢を投ずれば、扉ひらき、釜あらはる。傳ふらく、上古、鹽土老翁此浦に下りて、民に鹽を燒くことを敎へし時、用ゐしもの、卽ち是なりと。

釜神社と一町ばかり隔れる處、民家の裏に牛神社といふ小祠あり。祠前の小池の中に牛石

ありて、牛の形をなすと云へど、水多くして石見えず。傳ふらく、鹽土老翁が鹽を燒きし時つかひし牛なりと。釜もなほあやしきに、牛石に至つては、滑稽の極也。

請ふ、余をして、暫く鹽釜の過去を回顧せしめよ。むかし千賀の浦と云へば、陸奥の歌枕の一つなりき。鹽釜の浦一に千賀の浦とも云ふ也。曲浦深く陸地に入ること數十町、鹽釜祠下漁戸數十、浮世を山と海とに遮りて、魚網夕陽に晒し、扁舟蘆荻の間に浮び、八十島かけて澄む月影と共に、漁人の心もいかばかり澄みたりけむ。かゝる塵外の仙境も、伊達政宗仙臺を鎭するに及びて、頓に其面目を改めぬ。嗚呼この河東の獨眼龍、啻に軍陣の雄なるのみならず、また心を殖産工業にもそゝげり。政宗は漁村の鹽釜を變じて、一の港となしぬ。殖民に先ちて必要なるは女なることも悟りけむ、こゝに妓館を設くることを許しぬ。こゝに至りて、商家蜃居と接し、商船漁舟と竝び、絃歌欸乃に交れり。浪の浮寢の寂寞に堪へざりし舟人、こゝに上り來りて、さんざめぐれを誦して、粋な殿樣と謳歌したりけむ。政宗は更に鹽釜より南へかけて運河を開きぬ。深さ丈餘、幅七八間、陸前海岸の平野に延びて、名取川を貫き、阿武隈川の川口に至りて止む。その長さ十數里に及べり。此運河を貞山堀と稱するは、政宗の謚號に取れる也。この貞山堀今もなほ存す。明治十四年修繕して、舟楫の便少なからず。かばかり伊達氏の保護をうけて榮えしが、明治の世に至りて、その保護なくなり、港内淺くなりて、大船入らず。鹽釜の命脈絕えて、またもとの漁村にたちかへらむとす。時の戸長菊地氏之を慨き、縣廳に上申して、こゝに鹽釜港の修築起れり。この工事、明治十五年二月にはじまりて、十八年五月に終れり。港底を渫へて、其土をもり上げて、鹽釜の市街爲めに延長せり。こゝに於て鹽釜は蘇生の思をなしたるが、一二年たちて、鐵道仙臺より通ずることゝなり、益〻繁盛をいたせり。停車場は海に接し、鐵道は停車場を過ぎて海上にゆき

直に舟筏に接す。水陸の便、きはめて自在也。石の卷の繁華、今や鹽釜にうつらむとす。

鹽釜の繁昌するは、一半は松島と金華山とあるが故也。松島と金華山とありて、東北の天地爲めに寂寞ならざるを覺ゆ。余は松島に遊びしこと二度、金華山に遊びしこと一度、暫く未遊者の爲めに東道の主人たらざるべからず。

松島に遊ばむには、鹽釜にて汽車を下り、停車場前にて、舟をやとひてゆくを便とす。海上わづかに二里、幾十の島嶼、舟を送り、舟を迎ふ。松島には立派なる旅館あり。瑞巌の古刹を訪ふべし。五大堂、雄島の間に逍遙すべし。されど、これ未だ松島を見たるものと云ふべからず。眞に松島を見むとせば、舟をやとひて四大觀めぐりをなさゞるべからず。四大觀とは、大高森、富山、扇谷、多聞山、これ也。大高森とは宮戸島中の最高峯にして、四方の眺望極めて佳也。富山の眺望之れに次ぎ、扇谷之れに次ぐ。多聞山最も劣れり。多聞は灣の東南隅、扇谷は西南隅、富山は西北隅、大高森は東北隅にそばだてり。かく四觀四隅にあれば、殘る隈なく灣内を眺望するを得べし。而してこの四山に舟をよするうちには、灣内の島嶼も幾んど殘らず見るを得べし。

されど、四大觀めぐりのみにても、なほ足らず。島の奇なるものは、松島灣内よりも、灣外にあり。こはまた別に舟をやとはざるべからず。

されど、これのみにてもなほ十分なりとせず。松島に遊ばむものは、必ず金華山に遊ばざるべからず。大小數十の島、島として松を戴かざるはなく、松島の景、奇にして穩也。金華の一島、周圍數里、六十八峰天を刺し、四十八溪金砂を流す。山中、猿鹿多し。夜、祠家に宿すれば、一山森として、遙に妻呼ぶ鹿の聲を聞く。金華の觀、幽にして壯也。余は、盆池の趣ある松島に甘心するあたはず。塵外の別天地、東海の最大壯觀として、金華山を取らむ

とする也。

金華山に赴くには、鹽釜より氣仙沼行きの汽船に乘り、鮎川にて下り、山一つ越えて、牡鹿半島の最端に出で、二十四町の山雉の渡を渡舟にてわたるなり。鹽釜氣仙沼間を往復する汽船は、鮎川の外、石の卷にも寄港すれば、石の卷よりも之れに乘るを得べし。この汽船、荷物を主とせずして、乘客を主とす。その乘客も金華山參詣者多し。成田鐵道、成田の不動にて成立ち、琴平鐵道、琴平祠にて成立ち、氣仙沼通ひの汽船は、金華山にて維持す。迷信の交通を助くること、亦大なる哉。

黎明、客を呼ぶ汽笛の聲に、夢は孤衾鐵の如き鹽釜の客舍に破れぬ。辱食して船に上る。日は早や松島群島の上にあらはれ、大さ晝間見る所に幾倍して、未だまばゆき光を放たず。天光水色、上下相映じて、曉氣いと清爽也。出帆の時刻は既にすぎたれども、今朝船にのるべき筈の豪客、昨夜船員を拉して、紅樓に醉倒して、未だ船に來らず。いらちて鳴らす汽笛も、曉の香夢には徹せざらむ。終に船より迎にゆきて、漸く來る。船は烟を殘して出づ。

鹽釜祠の林丘、曉靄の外に依稀として、我を送れり。

代が崎を右に見、馬放島を左に見て、外洋に出づれば、船頭遙かに金華山の峰尖を認む。松島灣口をふさげる桂、野々、宮戸、寒風澤の四大島は、早やあとになりつ。左舷に石の卷の日和山を望み、船首に荻の濱を望む。石の卷をさること五六里の沖合なれども、海水の黃濁せるは、北上川の流し來れるなり。船首東南を指して、牡鹿半島を左にし、田代、網地の二大島を右にす。二島の中間に、龜の如く浮べるは、砥面島とかや。鮎川灣を過ぎて、波あらき牡鹿半島の一角をめぐれば、金華山面に當る。船は朱華表の下にいたりてとまる。船のこゝにとまることは稀なれども、此日黃金山神社の祭日に當り、參詣者多きを以て、わざわ

ざ寄港せる也。われも參詣者と共に船を下れり。

上陸すれば、山鹿角をふりたてゝ、人を迎ふ。爪先上りに七八町ゆきたる處に、黄金山神社あり。先年火災にかゝり、社務所は新築せられたれど、祠殿は未だ出來ず、假殿を設けたり。祭日なれば、賽者は常よりも多けれど、人家なき孤島の中、さまでのにぎはひもなし。賽路の兩側に地口行燈のならべるはよけれど、ぶざまなる綠門のたてるは、人を俗了する心地す。ひろき客殿に賽者の充滿せること、寄席の如し。肌ぬぎて、滴る汗をぬぐふは、いましがた山廻りしてかへれる也。尻はしをりてたゝずむは、これより山廻りせむとする也。やがて板鳴りて、山に登ることを報ず。知るも知らぬも、三十人ばかり玄關の前に立ちそろへば、祠官呼びとめて、一々握飯を與ふ。われは午食をせざるを例とすれば、うけず。白衣をつけたる導者一人、さきに立ちて導く。

路は祠の右の清溪流るゝ處より上る。きはめてのぼりやすき山坂なれど、一行の中、足弱きもの少なからず。導者爲めに歩をとゞめて待ち合せて上るを以て、路はかどらず。凡そ一時間許りにして、頂上に達しぬ。われ一人ならば、三十分ばかりにて上り得べき路程也。

頂上の尖りたる處に、小祠あり、龍藏權現といふ。東は太平洋茫々として際なく、一點の帆影をも見ず。西は近く牡鹿半島を望み、遠く松島の群島を望む。北は、かさなれる峯にかくれて見えず。南は遙かに下總の犬吠崎と相對す。脚下山雉の渡を帆かけて行く渡舟、さながら白鷗の如く、矚目爽快を極む。一行拜し終つて、茫然佇立するものあり、草の上に横はるものあり、石に踞するものあり。十二時にはなほ一時間もあませど、腹へりたればとて一人俑を作りて握飯を食ひはじむれば、衆みなこれにならふ。その飯の香をかぎつけたりけむ、鴉幾羽となく集り來り、近きあたりの木にとまりて、啞々として啼きて、求むる所ある

に似たり。その人になれて、おそれざること、淺草觀世音の鳩もたゞならず。こゝにまた一人俑を作りて、食ひあましたる飯を紙につゝみて空になぐれば、その未だ地に落ちざる前に枝上の鴉飛び來りて、ついばんで去る。衆之にならひて、紙包空に亂飛するに、鴉一々之を受く。恰も洋犬の菓子を受くるが如し。かくて擲ぐべき握飯つきぬ。なほ口にうけざる鴉多けれども、もはやねだるべきものなしと見てとりけむ、一羽去り、二羽去り、終に隻影をもとどめず。かしこき鳥かな。無邪氣なる善男の徒、あばしは鴉になぐさみしが、裏山の路なほ遠ければとて起つ。導者曰く、神輿の下るを拜せむと思ふ方は、これよりもと來し路を下られよ、裏山廻りせば、間にあはざらむと。されど一人も之に應ずるものなかりき。それもその筈なり。金華山の奇は、裏山にあり。裏山を廻らざるものは、金華山に遊びたりとは云ふべからず。

路は東に下る。斧斤入らざること幾百千年、老樹しげりて天を刺す。蘚苔につゝまれたる怪岩の下より、清水流れ出でゝ溪を爲し、白雲洞穴にわきて、人と路を爭ふ。巨石處々に横はりて、一々其名あれども、さまで奇なるものありとも覺えず。衆はじめは魚貫して下りしかど、いつしか脚の健なるものは先んじ、弱きものはおくる。おくるゝと一町となり、二町となり、四五町となり、終に白雲の中に入つて見えず。下りて海岸に出づれば、廣大なる岩層、斜下して海に入る。之を千疊敷と稱するは、その廣きに取れるなり。千疊敷の土を戴く處、二株の老松清蔭を横へ、萬里の天風に微嘯す。こゝに憩ひて、汗をぬぐひ、煙草をふかし、且つ好風景を賞し、且つ後著者を待ちしが、最もおくれたるものゝ來りし時は、われらは既に休みあきたる頃なれば、幾んど入れちがひになりて發足す。斷岩さけて深く山に入る處、千人澤と稱す。また大浪越とも稱す。兩崖の間、わづかに數尺、深さ數十尺、長さ二三

百尺に及ぶ。天吳戲れに靈鋸を以てきりさきけむ、怒濤雪を崩し、萬雷をとどろかして進入するさまは、たゞこれ白龍の狂ひ亂るゝもかくやや。幾たびか淸溪をわたり、危巖をつたひ、終に急坂を上りはつれば、山上に通ずる路あり。海岸に下る路もあり。はたとまどひて導者の來るを待つ。導者はさまでおくれ居らざれば、七八分にして來る。曰く、下られよ、最も奇峭雄偉を極むる大箱崎に出づるなりと。

大箱と名づけたるもうべや。けに横の一片と蓋とを除き去りたる一大巨函、天吳之に珍寶を藏せむとするも、怒濤ねたんで奪ひ去らむとす。俯して之を臨めば、心慄き目眩す。奇極まつて怪に、雄壯極まつて悽愴也。こゝより數町にして小箱崎あり。大箱崎よりは稍小なれども、溪流落ちて巖角に碎けて霧となり、日光に映じて虹を現ず。壯觀、大箱崎にゆづらず。凡そ此間、巉巖長く連亙し、高く峭立し、北に向つて、大濤の突擊に當り、濤怒り、巖叫ぶ。前面には江の島の列島波間に浮沈し、手をのばさば、之を捫すべし。金華山の奇觀、こゝに至りて極まれり。

路は海をはなれて峯に上る。もはや見るべき物なければ、足を早めて急行するに、いつしか獨往の客となりぬ。脚つかれ渴を催したる時、天狗の力水とて、巖隙より出づる淸水を得たるこそ、いとうれしかりけれ。峯又峯を上下するに、一鳥鳴かずして、山更に幽なるを覺ゆ。巖石のにはかに動くかと見れば、臥したりし鹿の、わが足音を聞きて逃げゆくなり。鹿より小なるもの驚いて走る。幾たびとなくふりかへりて我を見るは、人が恐しきにや。其前方の顏赤く、後方の尻も亦同じく赤きは猿なり。はじめの程は、これ顏、これ尻、見わくることを得しが、終には見わけつかず。而して猿のふりかへると、なほ止まず。一赤一赤相轉回して、遠く白雲深き谷底に落ち行きぬ。愛宕祠に來れば、本社近く脚下にあり。路、本社の

左に出でゝ、山廻りはこゝに終れり。

秀靈なる哉、金華の一島、牡鹿半島と二十四町の海峽を隔てゝ、東海の外に孤立す。さらでだに潮流急なる山雉の渡、山靈一たび怒れば、風浪險惡、往々行舟を覆す。一島これ山、一山これ島、島中絕えて平地を餘さず。燈臺と黃金祠との外には、農家もなく、漁家もなく、住む人よりも猿多く、鹿多し。峰脈六十八、中央に最も高き主峰を起し、溪谷四十八、處々白珠を飛ばす。洵に塵外の別天地、東海の最大壯觀といふべき哉。

祠家に一宿して、夜、猿鹿の和鳴するを聞くも興あらむと思ひしかど、宿らむとする賽者多く、雜沓甚しきに辟易して、せめて鮎川の漁家なりともと思ひしが、幸なる哉、石の卷鹽釜行きの汽船、午後四時にこゝを發すと聞き、之にのることゝさだめぬ。海濱に下れば、汽船は早や煙を吐きつゝ、汽笛をも鳴らしつ。三四町の間、艀舟によらざるべからず。而して乘客多くして、艀舟四五艘にてもつみきれぬ程なるに、別に山雉の渡をわたらむとするものも多し。汽船の方が急なりとて、舟の大なる渡舟を艀舟にせしむといふに、のり込むもの多かりしかど、舟夫不平を起して舟を出さゞれば、また乘りかへ、漸くにして一の艀舟出でむとすれば、衆先を爭うて乘る。乘りおくれたるものは、浪にうたれて、衣袂悉く沾ふ。罵る聲、浪の音に和して、混雜一方ならざるさまは、舟中の指數ふべしと言ひけむ昔も、思ひやらるゝばかり也。この乘りうつる混雜に、船の出發は、豫期の時刻より三十分許りおくれたりき。

乘客を主とする船とて、客室あり。殊に上等室もあり。こゝは下等室のこみあへるに反して、乘客わづかに六七人にすぎず。いづこの豪客にや、とんび著て金時計ぶらさげたるは、道者の中にめだちて見ゆ。酒をとり出して、杯を仲間のものにまはして、よく飲み、よくま

やべり、座を一人にて持ち切る。その杯終に我に廻り來る。一河の水をむすぶも他生の縁、一枚の下は奈落なる船の中、死ぬるも活くるも、運命を共にせざるを得ざるべき身の、一見直になれて、話しあうて見れば、人に鬼はなし。われも金華山を下りたる時、一杯をと思ひたれど、祠官にねだることも出來ず、山中に酒賣る家はなし、船中はなほ更なり。喜んでその好意を謝して、數杯をかたむくる程に、微醺を催し來りぬ。船、鮎川にとまりたるに、下る客なくして、乘る客あり。赤毛布來りて上等室の扉を開かむとすれば、こゝは上等なりとどなりつけたる舌いまだ乾かざるに、一婦人、老媼をつれて來る。上等の客種ならぬことは一見たどちにわかれど、いざはいり給へと、にはかに猫撫聲出すもをかしや。今少し火鉢の方へより給へ、座蒲團敷き給へ、茶を菓子をともてなせば、女もよろこべるさまなり。豪客終に杯をまはす。杯のみを受けて、酒は一滴だにうけざるも、志ほらし。返杯をと、酒瓶とりたるを志ほに、御迷惑ながら、今少し酌して下されずやといふに、女も悪い顔はせず。珍客として迎へ置きて、いつしか酌婦に代用しける也。女、志ばしが程は跪坐して酌せしが、浪次第にあらくなるまゝに、堪へかねて横臥しぬ。終には船暈を催して吐きぬ。臭氣一室に滿ちて堪ふべからず。さきには、美人の酌に酒一層うましなど云ひて、にこ〳〵せし道者ども、今は鼻つまむもあり。こゝが男の胸の見せ處と、わざ〳〵近よりて脊中さすりてやるもあり。思ひかけきや、ほゝゑみて嬌語を發せし口より、かゝる臭物を吐き出さむとは。あはれむべし、娑婆の衆生、臭骸相抱いて樂むも、竟にこれ造化が人をして子孫をつくらしむるの悪戯なるを知らず。色卽是空、南無阿彌陀〳〵。

松見の瀑

太田吉司氏は、體格强壯無比、脚殊に健也。このあたりの山々、足跡の及ばぬ隈もなし。數日の糧をもちて、ひとりにて行くことも志ばゝ〳〵也。『山の神』と稱せらる。日に何里あるけるかと問へば、五里ぐらゐなりといふ。如何に『山の神』とは云へゝげに、さもあるべし。路のなき嶮山を五里もゆくは、平地を十五里ゆくよりも困難也。太田氏曰く、このあたり瀑多し、見るに足るべきの瀑、二十を下らず、就中、松見の瀑が、最も大也、請ふ、往いて見よ、われ案内せむと。こゝも十和田の區域也。見ざるべからずとて、之に應じぬ。

蔦温泉に一夜とまりて、明くれば雨也。太田氏曰く、松見の瀑へゆくには路なし、溪流を徒歩すること四十回、水增せば往くべからず、この雨にては危險也、明日にのばされよと。さらば、仕方なし、鄕に入つては、鄕に從へ、山に入つては、唯『山の神』の命令を奉ずべしとて、其言に從ふ。春汀の待ちわぶることは察せざるにあらざるも、この行、十和田の風光を探るを主とせることは、春汀も承知の上なれば、われは、主とする所に從ひて、春汀に負かむとする也。

午前十時に至りて、『山の神』又來りて曰く、この模樣ならば、往かるべし、雨を衝くの勇ありや、否やと。大に有りとて起つ。百穗が惠與の眞綿を脊中に入れ、綿入を貸りて著、頭には、『ばをり』を被り、脚には、『はゞき』をつけ、簑を著る。太田氏先にたち、一人の男、後より余を護衞してゆく。

路なき山を幾度か上下して、黃瀨川の溪流に出でたるまでに、一時間半かゝりぬ。こゝよりは、太田氏の云ひし如く、四十回、黃瀨川を徒渉する也。左岸に瀑多し。その中にて、鍋倉の瀑といふは、はじめ二丈ばかり奔流し、直ちに噴水の如く、斜に飛び上り、三丈ばかりにして崖壁に當りて、五六丈の懸崖を瀉下す。素人受けのする奇瀑也。

小石の洲ありて、水、左右に流る。こゝを御所河原と稱すといふ。名が面白しとて、休息して、酒し、飯す。一瓶の酒なほ餘る。瀧壺まで持ちゆかむかといふ。いや〳〵、瀑を見るに、酒なかるべからずなどいふは、まだ風流の半可通なるものなりとて、荷物は、すべてこに置きて、また上る。

松見の瀑、一に黄瀨の瀑とも云ふ。一山全く骨を露はし、上は裂けて鋏の如し。其合する處より、一川の水、總束せられて直下す。凡そ二十丈、下はまた五六丈の巖を蔽うて下る。此上方の二つに裂けたる巖の山は、姫小松を戴く。後を見れば、巨巖天を衝きて、その頂にも、姫小松生ひたり。このあたりの山々には、松なし。たゞこゝのみにあるを以て、松見の瀑といふなりとぞ。岩質はと問へば、立武岩なりといふ。巖に松、而して三十丈の飛瀑と云ふのみにても、山水の遊に慣れたる者は、既に飛び立つ思ひすべき也。

午後七時十五分、温泉の宿にかへる。午食に三十分、瀧壺に十分休息し、正味八時間半は少しも休息することなく、歩き通しに歩きたるが、里程は、わづか往復四里ぐらゐなるべし。

親不知

怒濤斷崖を嚙み、過ぎゆく旅人、親、子を援ふに遑あらず、子、親を援ふに遑あらず。天下最も危險を極むるの處、親不知の稱はこれより起れりと云はむも、陳套にや。げにや越後の越中に接する處、青海より市振迄五里あまりは、山脚直に海に接して、行路を通ずるに由なく、人は浪際の砂地を歩まざるを得ず。散歩がてらに半里一里の砂地を歩むは、興味あるものなれど、日暮れて路遠きに惱める旅人が、重き荷物を肩にし、ごぼ〳〵とはいり込む五里の砂地を歩むつらさは如何ばかりぞや。況んや外波と市振との十數町の處には、所謂親不知

の絶險あるをや。今は崖上に新道つき居れど、冬は雪にふり埋められて、舊によりて、砂地を通らざるを得ずとかや。眠るが如き夏の日本海、親不知の奇も見るべからざらむとは思へど、せめて其場所なりとも見てゆかむとて、蓐食して越中の松本開の旅店をたち出でしは、午前四時也。水橋より八時發の汽船にのらむとて疾行せしが、咫尺辨ぜざる濃霧に方角を失ひて、富山市の方に出でぬ。三角形の一線を眞直に水橋に出づべかりしを、知らぬ事と云ひながら、他の二線を經過することになりて、二里以上の路損せしことの馬鹿々々しさ、歩き居りては、八時の汽船に乘りおくれむとて、人力車にのりぬ。

水橋より直江津通ひの小蒸汽船にのりぬ。船近く海岸を行くことなれば、船上より親不知を見るを得べしと言ふものありたれど、現に其地を蹈まざれば、腹の蟲が承知せず。泊と云ふ處にて、汽船を下りぬ。こゝより二里ばかり行けば、一川を界にして、越中と越後と相わかるゝ處あり。其川より半里ばかり行きて、市振に達す。この町はづれより山脚海に延び、むかしの砂地の行路は、こゝより始まる也。親不知以外は成るべく歩み易き新道をとて、なほ十餘町は、崖上の新道を歩みゆくに、清水滴る處に、一軒の休み茶屋あり。老夫一人網をあめり。水を乞ひ汗を拭ひつゝ、ゐばし休息して、崖を下り浪際に出でゝ、始めて砂地を歩む間もなく、やがて親不知の險に出でぬ。十餘町の間斷崖そゝり立ちて、凸凹一ならず。浪進む時は凹處にさけ、退くを待ちて凸處を過ぐるなりとぞ。されど、これ浪あらき時の事也。今は夏の事とて、日本海鏡の如く、浪遠く斷崖を去りて、景致極めて平凡なるには、失望せざるを得ざりき。

親不知盡きて、また崖上の新道を歩みて、外波村を得。市振と外波との間は凡そ二里也。又十二三町にして歌村を得。この間、波上處々巨巖うかび、風景やゝ佳也。歌村より二里半

にして青海村に達し、始めて崖上の道をはなれぬ。このあたりは、石灰をつくり出すが爲めに、賑へる處也。日くれて路はくらけれども、晝のあつさは、夜色の中に消えうせたるに、歩き心地よく、夜八時、絲魚川につきぬ。青海をさること一里二十四町、泊をさること、凡そ九里。汽船宿にて晩食をたゝむる程に、一天恐しげにかき曇り、あらき風、障子をひらく能はざる迄に吹き出でぬ。直江津通ひの汽船のこゝに立ちよるは、十二時なりと聞くまゝに、荷物を枕に眠りけるが、忽ち女中に呼び起されて船に上る。夜暗くして、あやめも分かず。乘客多くして、ごろ〳〵と犬の兒の如くころがれり。甲板の上に背中あはせて臥たるものを、雲間をもるゝ微月の光りに、すかし見れば、年まだ若き田舍娘なりき。

午前三時過ぎ、直江津につきて上陸す。宿屋の男の、提燈つけて客を迎へに來れるもの多し。わが洋服姿は闇の中にも紳士と見えけむ、先を爭うて來り誘ひたれど、嚢中のさびしさに、直に停車場に赴かむとす。されど、停車場の方角を知らず。人多く行く方に從ひ行かば間違なからむとて、進み行きしに、一人へり、二人減り、終に先行するもの絶えて、岐路あり。此方ならむと心あてに進み行かむとすれば、停車場はこちらなりと、提燈つけたる男に注意せらるゝこと數度、闇に顔も見えねば、旅の恥はかきずてと忍びに忍びて、漸くにして停車場につきて、ほッと一息つきぬ。

嚢中をさぐるに、漸く下等に乘るだけの汽車賃あり。六時まで待ちて、汽車にのりて東京に向ひぬ。長野にて善光寺を見て、次の汽車に乘るだけの時間の餘裕はありたれど、金なければ、思ひとどまりつ。午食の料に、鮨買へば、財布また一文もなくなりぬ。心細きこと限なし。この心細さは、越中の松本開を出でし時より、我胸をはなれざる所なり。四十兩つかひ果して二分殘るとは、梅川忠兵衛が昔の道行、われは百金を懐にして出雲を出で、日を